



ANALYSER OG FORSTÅELSER AF NORDISK LITTERATUR

——Læsefrugter i Tanabe Seminar, 2011——

目次

はしがき -----	田辺 欧	1
第1部・その1：デンマーク編 （第1期レポート）		
Lise Sørensen の詩-----	今川 陽介	5
Pia Tafdruf の詩-----	鹿倉 麻未	9
Friedrich Hölderlin の詩-----	川原 知己	13
Carsten René Nielsen の詩-----	中川 真麻	16
Jens Peter Jacobsen の詩-----	藤岡 愛実	20
第1部・その2：デンマーク編 （第2期レポート）		
Den blomstrende have における Mette の人物像と役割についての一考察--	今川 陽介	27
Kim Fupz Aakeson <i>Alting og Ulla Vilstrup</i> の考察-----	鹿倉 麻未	31
Den blomstrende have に関する考察-----	川原 知己	38
書籍から映像へ～ <i>Alting og Ulla Vilstrup</i> と Rene Hjerter～-----	中川 真麻	42
<i>Alting og Ulla Vilstrup</i> 作品中の映画 Hjerterfri の原作と映画での描かれ方の比較 -----	藤岡 愛実	45
Den blomstrende have に対する様々な見方 -----	橋本 詩織	48
Ungdomsroman <i>Alting og Ulla Vilstrup</i> -----	板倉 亮平	52
<i>Alting og Ulla Vilstrup</i> 分析——省略箇所に見る原作と映画の違い-----	宮城 悠旗	56
“Den blomstrende have”の自然，風景描写における考察-----	奥村 佳子	61
第2部・その1：スウェーデン編 （第1期レポート）		
Erik Blomberg の詩 -----	早田 有里	69
Harry Martinson の詩 -----	丹羽 美咲	72
Pär Fabian Lagerkvist の詩-----	弘瀬 祐也	75
Edith-södergran の詩-----	渡邊 友里	78
第2部・その2：スウェーデン編 （第2期レポート）		
絵本『どうぶつそうぎやさん』（Alla döda små djur）-----	北田、小廣、徳原、早田、 丹羽、弘瀬、渡邊	83

ここ数年文学ゼミの授業は火曜日の2時間目と3時間目に設定されている。今年、第1期は3年生のみ、デンマーク語専攻とスウェーデン語専攻を合同にし、第2期はデンマーク、スウェーデンそれぞれの言語にわけて授業を行った。第1期では最初に『小説の読み方』（平野啓一郎著）と『近代文化史入門』（高山宏著）を講義用のテキストとして使用し、まずは文学解釈・批評・分析のさまざまな可能性について学んでもらった。その後、受講生全員が自ら文学を読解するのに有用と思われる参考文献を選び、その本について講評してもらうことにした。全員が自分で選びとった参考文献はそれぞれが大変魅力的で、私自身読んだことはなかったが、是非読んでおかねばならないと感じさせる本があり、逆に学生から教えられた。また第1期ではデンマーク・スウェーデンともに全員に詩を1編選んでもらい、訳と解釈について全員で議論した。このゼミ論集を創刊した所期の目的は詩の解釈と紹介にあったことをふり返れば、今後もデンマーク語・スウェーデン語、ともに原語で詩を読む作業は継続していきたい。

第2期、2時間目のスウェーデン文学ゼミでは、昨年夏から1年間スウェーデンに留学していた3人を再び迎えて7人となり、まずは絵本の翻訳作業『どうぶつそうぎやさん』（*Alla döda små djur*）からスタートした。絵本の翻訳作業と言うと、簡単そうに聞こえるがそれがなかなか難しい。「口語体」、「こども用語」、日本語に書き換える時のかな・漢字の使い分けなど、あらためて勘案すべき点は多く、おそらく後から読み返すとふたたび校正の必要があるに違いない。翻訳作業の難しさを皆ひしひしと感じたことだろう。デンマーク文学ゼミは、スウェーデン文学ゼミ同様、第2期に留学先から帰国した2人が加わり、大学院生も含めて9人、全員で2つのテキストを共有し、読解と分析を中心に進めた。今年は、表表紙がデンマーク文学ゼミ、裏表紙がスウェーデン文学ゼミの選択によるものだが、表表紙は教材に用いた Kim Fupz Aakeson の *Alting og Ulla Vilstrup* を映画化した作品 Rene Hjerter の DVD のジャケットだ。裏表紙はスウェーデン文学ゼミが選んだ大きな十字架の写真だ。青い空、広大な野原、陽の光をうけて影を落とす十字架。このモチーフも第2期で取り上げた絵本のテキストとどこか関連しているように思う。両ゼミとも最後の数回は卒論執筆予定の3年生を中心に個人の発表に充てたが、皆それぞれによく準備をして臨んでくれた。来年の卒論の出来が今から楽しみだ。

2012年は4年生のデンマーク・スウェーデン文学ゼミ総数が14名の大所帯となる。そして全員が卒論を執筆する。今までは授業外の時間を使って個々に卒論の指導を行ってきたが、今後は指導方式を改めざるをえない。しかしながら文学の授業は一つのテキストに皆で取り組んでこそ意味があり、解釈の可能性が広がり、文学を学ぶ楽しさがある。そのことと個人発表のバランスをどのようにとるのか、まだ授業の進め方を模索している段階だ。ただ「文学を愛し、想像／創造する喜びを見だし、考える力を培う時間を皆とともに創りだしてゆく」授業にしたいと思う。

最後に今回の論集編集作業に偉大なる貢献をしてくれた院生の奥村佳子さんに心から感謝の辞を捧げたい。どうもありがとう！

第 1 部 ・ その 1

デンマーク 編

Enhed

Uendelige timer gennem byen
fra dagen begynder at gråne.
Vi cykler gennem alle nattens timer
som båret af den hvide vingemåne.

Den bar os undenfor - her stod vi stille
uendelige år, bag vinduesglas,
hvor svaesværme styrtede forbi os
og lød som blæsten på en åben plads.

Beständig er vi midt i byens hjerte,
hvorfra vor skæbnes røde kredsløb springer.
Storbytrafikken løber støt deroppe,
båret af bøgeskovens brede vinger.

出典 : “Blæsten undenfor” Lise Sørensen (1956)

一つのもの

悠久の時が町を通り越し
灰色に染まり始める。
私たちはすべての夜を駆け巡る
白い翼の月に運ばれているかのように。

その翼は私たちを外へと連れ出しーそこで私たちは静かに佇んだ
終わりなき年月、窓ガラスの後ろで
ツバメの群れが私たちを飛び越し
広々とした場所で吹く、風の音のように聞こえた。

絶えず、私たちは街の心臓の中にいて
そこから、運命の赤い血潮が弾け出す。
街の巨大な交通網はしっかりと支えられて走り
ブナの森の大きな翼に運ばれている。

(今川陽介訳)

作者紹介：Lise Sørensen (1926～2004)

デンマークの詩人、随筆家、批評家、男女同権論者。

1926 年にコペンハーゲンで四姉妹の末っ子として生まれる。6 歳の時に彫刻家であった父親を亡くす。1943 年、17 歳の若さで、ジャーナル紙『Vild Hvide』に彼女の詩が掲載されデビュー。1946 年に初の詩集『Rodløs』を出版。

1947 年に同僚とともに訪れたヘルシンキで腸チフスに感染し、一名をとりとめたが、この同僚は命を落とした。この経験が彼女の詩に大きな影響を与え、約 10 年後の 1956 年に、『Blæsten undenfor』を出版。自然描写や愛情表現に重きを置くようになる。

1964 年に出版した『Digternes damer』やエッセイでは、読者にジェンダー的役割の議論を投げかけ、フェミニズム運動の到来を予期した。

1970 年代以降になると、フェミニズム運動に刺激を受け、自らも積極的に女性解放運動やその議論に参加するようになる。1960 年代から 1980 年代にかけて、女性解放に関する長編の書籍を執筆したが、多くは物議を醸すものであった。

彼女の詩のあらゆる箇所で、自由に対する彼女の衝動を感じ取ることができる。また、韻文という従来の形式にとどまる事なく、散文形式の詩という、新たな形式を模索していた。

作品解釈・批評

この作品では、一連から三連を通して、自然と文明が対比されている。一連の"Uendelige timer gennem byen fra dagen begynder at gråne." では、街とそれを覆う夜が対比されており、三連の、"Storbytrafikken løber støt deroppe, båret af bøgeskovens brede vinger." では、巨大な道路とそれを支えるブナの木が対比されている。どちらも自然 (uendelig timer, bøgeskovens brede vinger) と文明 (byen, storbytrafikken) が対比的に描かれている。その他にも、詩全体を通して、至るところに、"vignemåne" や、"svalesværme" といった自然を連想させる単語や、"cykler" や、"vinduesglas" といった、文明を連想させる単語がちりばめられており、自然と文明の対比を強めている。

表現を見てみると、一連の"Uendelige timer gennem byen fra dagen begynder at gråne", "alle nattens timer"はどちらも夜、つまり、闇の長さや大きさを表していると考えられる。というのも、デンマーク人にとって、夜は一日に占める割合が大きく、それだけ夜や闇を長く、巨大なものとして感じていると考えられるためである。二連の"uendelig år"も同様に夜の長さを表していると考えられる。

二連では、"stille" と "styrtede" という静と動を表す単語が使われており、静かに佇んでいる「私たち」と、その私たちを勢いよく飛び越えていく「ツバメ」が対比的に描き出され、効果的な演出を醸し出している。

三連では、街が比喻として使われており、これは若い人々を表している。絶え間なく活動し続ける都会は若者を象徴している。また、"storbytrafikken"は血管を比喩的に表し、"skæbnes røde kredsløb"はその中を流れる血液を、さらには、中心"hjerte"から弾け出す感情を描き出している。ブナの木 (bøgeskovens) はデンマークの国樹であり、誰もがその心の

中に持っているものであり、自然をいつも感じていることを表している。

さて、ここまで、簡単に一連から三連を通して解釈を加えてきたが、では、この詩の題名である"Enhed"とは、何を意味しているのだろうか。"Enhed"とは「一体性」や「一つになること」を意味する。何と何とがひとつになっているのだろうか。上で述べたように、この詩は全体を通して、自然と文明とを対比的に描き出している。自然と文明を並列的に、同時的に表現しているといっても良いだろう。では、"enhed"とは自然と文明とがひとつになっていることを表しているのだろうか。そう簡単ではないであろう。というのも、三連において筆者は、"Beständig er vi midt i byens hjerte, hvorfra vor skæbnes røde kredsløb springer. Storbytrafikken løber støt deroppe, båret af bøgeskovens brede vinger." という表現を通して、人間と文明（byen）を、比喻を用いることによって重ね合わせているからである。つまり、"Enhed" という言葉は、人間と文明の一体性も表しているのである。これは、自然と人間の関係においても言うことができる。上で、ブナの木（bøgeskovens）について述べたように、人間はいつも心の中に自然を感じることができる。つまり、"Enhed" は同時に、人間と自然の一体性も表しているのである。

以上から、次のことがわかる。"Enhed" とは、単に自然と文明や、文明と人間、人間と自然という二つのものの一体性をあらわしているのではなく、これら三つのものすべてが一体性をもっている。さらに言えば、あらゆるものがひとつになる、あらゆるものはひとつである。ということであらわしているのである。

Pia Tafdruf の詩

鹿倉麻未

TRANSPARENTS

透明

Fra sommerens junigrå

夏、六月の灰色の空から

solen der i eksplosiv ømhed

爆発的なやさしさに包まれている太陽が

gennemlyser hvert et blad

葉の一枚一枚を透過している

mens en rød rose som eroderet latter

一方、一輪の赤いバラは侵食された笑みの
ようで

slår op i stilheden, det grønne

静寂の中で花開く、緑の葉々は

der omgiver den fra alle sider

四方からバラを包み込んでいて

indtil skyggen der vokser ud af skoven

陰を落とし、森の外に向かって影は伸びて
いく

atter bringer rosen til tavshed

再びバラは沈黙する

og i et strejf tilhvisker mig

そして閃光を浴びながら私に囁きかける

at kærlighed er konstant frygt for tab.

出典 : “KRYSTAL SKOVEN” PIA TAFDRUF

愛とは尽きることのない喪失への恐れなの
だと。
(鹿倉麻未訳)

作者紹介：Pia Tafdruf (1952~)

Pia Tafdruf は、デンマークの女性現代詩人・作詞者である。1952 年 5 月 29 日、コペンハーゲン生まれ。裕福な農家の Finn T. (*1925) と Elin Hannover (*1928) の間に生まれた。幼いころから詩作に親しんで育ち、1977 年にはコペンハーゲン大学にて芸術学の修士号を取得し、本格的に創作を開始する。詩集は現在までに 25 カ国語に翻訳され、本国デンマークを中心に世界中で親しまれている作家のひとりであるが、邦訳の出版物は未だ無い。Pia Tafdruf の詩は、身体と心のつながりや、人生の探求、アイデンティティなどを取り扱ったものが多く、緻密でありながらも一種の浮遊感を持っている。詩の中に多く登場する、大地、水、鳥、月などの一般的なテーマや、卵や犬、血と悲しみなどの一見つながりのないもの、その多くは暗喩である。緻密な暗喩の一つ一つに深い知性が感じられる。彼女が創作を通して提示する、アイデンティティ、身体との調和、人生と死などの問題は、そのまま現代のテーマを反映している。現存し今も創作を続けている作家ゆえに、その功績や影響を語るにはまだ早すぎるようだ。現在までに 11 冊の詩集を出版している。詩だけでなく、ラジオ放送もされた『山中の死』(1988)、『地球は青い』(1991) などの戯曲作品も発表している。また、ダンス用台本として『ヴィソの町』(1999) がある。デンマーク現代詩アンソロジーを 2 冊編集し、1989 年にはデンマーク文学アカデミーのメンバーに選ばれた。詩は歌詞に使われることも多く、作詞者としての一面もある。1991 年に Nordic Council's Literary Prize in 1999、2006 年には Swedish Academy's Nordic Prize in 2006 を受賞。2001 年には、Knight of the Order of the Dannebrog に任命されるなど、国際的に活躍している。

作品解釈

北欧の人々にとって夏は光の季節である。暗く長い冬を乗り越えて、待ちわびた太陽を思い切り享受し、恵みに感謝する。日本とは異なった北欧の特殊な気候的条件をふまえると、詩の出だし”Fra sommerens junigrå”は「光溢れる夏である六月の曇り空から」と言い換えられる。だが、夏＝光の季節であるのにもかかわらず、灰色＝曇り空と、早速、矛盾が生じる。次の行を見てみると、”solen der i eksplosiv ømhed”とある。直訳すると「爆発的なやさしさの中にある太陽」といった意味になるのだが、爆発的やさしさ、またもや矛盾する。そこで、暗喩がこめられているだろうと推測し解釈を試みた。

まずこの詩は一文を詩に仕立てたつくりになっている。節はなく、はっきりとした韻も踏まれていない自由詩である。文章通りに意味をとると「六月の曇りの日、太陽の光が雲を透過してバラの葉に降り注ぐ。そして、静かに一輪のバラの花が開くのだが、その花は侵食された笑みのようである。それから葉々が森の外へ向かって陰ができるほど生い茂るので、バラの花は沈黙してしまう。今度はそのバラが一筋の光の中で私に向かって、愛とは尽きることのない喪失の恐れなのだよと語りかけてくる。」となる。

この詩を解釈するにあたって、「光」に注目したい。

sommer(夏), solen(太陽), skyggen(陰), strejfe(閃光、一筋の光)など、光を関係する単語が散見

するからだ。

”sommerens junigrå”

sommer はすでに述べたように夏＝太陽の季節を表現する。よって、夏の季節＝六月の曇り空と解釈できる。

”solen der i eksplosiv ømhed”

爆発的なやさしさの中にある太陽、水素とヘリウム原子の核融合の爆発的なエネルギーの中にある太陽、そのエネルギーが「やさしさ」なのだ。太陽のエネルギーつまり、「光」が「やさしさ」に暗喩されている。

”gennemlyser hvert et blad”

その光が”junigrå”＝「夏の曇り空」を透過してバラの葉の一枚一枚へ降り注いでいる。gennemlyser とは”gennem+lys”で、X線やレントゲンのように光線が透過するさまをあらわす言葉である。

”mens en rød rose som eroderet latter slår op i stilheden”

葉に光が降り注ぐ一方で、一輪の赤いバラは侵食された笑みのよう、静かに花を開かせる。葉緑体が光を受けて光合成をし、作られた養分が花を開かせるそのさまを「侵食された笑み」と表現している。

”det grønne der omgiver den fra alle sider indtil skyggen der vokser ud af skoven”

緑の葉々は上下左右全ての方向からバラの花を囲み、陰ができるまで森の外へ向かって成長する・・・光を受け続ける間、葉は光合成を続けるのでどんどん成長し、バラの花には陰がかかってしまう。なおも、葉は光を求めて森の外へ向かって生い茂るので陰もまた、広がっていく。

”atter bringer rosen til tavshed”

そして、バラの花は再び沈黙がもたらされる。

”og i et strejf tilhvisker mig at kærlighed er konstant frygt for tab.”

葉に覆われた中で差し込んだ一筋の光、その光を浴びるバラの花が私に囁きかける、「愛とは絶えることのない喪失の恐れなのだよ。」と。

光がやさしさの暗喩だとすると、曇り空を透過して葉に降り注ぐ光は光の源である太陽から発せられるやさしさや慈愛となる。それを受ける葉々は、やさしさや慈愛を感受するもの、つまり「心や感受性」と捉えられる。雲、すなわち——天と地を隔てる層、自己の内なる世界と、外の世界を隔てる層——を透過してやさしさが届くのである。赤いバラの花は「愛」を象徴し、やさしさや慈愛といった目に見えない「透明」なものの具現化された、つまり、やさしさを受けて心に愛が芽生えたという解釈が成り立つ。しかし、花は葉と違って光量に比例して成長するというものでもなく、葉によって陰が作られてしまう。心や感受性は絶え間なく光を求めて変化し成長していくからだ。すると、バラの花の成長は止んで、バラの花が沈黙する(＝愛が落ち着く)。四方を葉に囲まれて、光が十分に届かない中

で葉の隙間から差し込む一筋の光線、その中でバラの花が「私」に「愛は絶え間ない喪失の恐れだ」と囁きかけるのは、「太陽の光は尽きることはないが、すぐに自己の心によって遮られてしまうような儚さを持っているのだ」という示唆で、愛とは行為ではなく現象であるがゆえに永遠ではないと逆説的に説いているのではないだろうか。

加えて、*ømhed* にはやさしさだけでなく「痛みや脆さ、壊れそうなもの」といった意味もある。太陽からもたらされる光には「やさしさ」だけでなく、「痛みや脆さ」が共にあるという含みがある。

授業中にいただいた意見の中に、太陽という絶対的なものは神を象徴し、その光は神の愛を意味しているのではないかというものがあつた。キリスト教的な「神は唯一の絶対的存在であるのに対し人間は弱く不完全な存在だ」という視点からのぞくと、「人間は常に神の愛や恵みを享受しているが、人間の恵みを求める食欲さが却ってその愛を見失わせているのだ」といった解釈も見えてくる。また、「侵食された笑み」は人間が作り出した宗教という仕組みに対してのちょっとした皮肉であり、「喪失の恐れ」とは絶対的な神を喪失することへの恐れだとの解釈も可能である。

まとめ

「TRANSPARENTS---透明」というタイトルに、光や、やさしさや心、愛といった目に見えないもののすべてが込められている。バラの花や葉と透明なものの関係を用いて「愛とは尽きることのない喪失への恐れなのだ」と筆者は表現している。

参考文献

Pia Tafdrup official <http://www.tafdrup.com/>

Dansk kvindebiografik leksikon <http://www.kvinfo.dk/side/170/bio/924/>

Litteratur siden dk <http://www.litteratursiden.dk/forfattere/pia-tafdrup>

Den Store Danske

http://www.denstoredanske.dk/Kunst_og_kultur/Litteratur/Dansk_litteratur/Efter_1940/Pia_Tafdrup

Halvdelen af livet

Der hænger gule pærer
og fuldt af vilde roser
er landet i søen
I elskelige svaner,
og drukne af kys
dykker I hovedet
i hellignøgternt vand.

Ve mig, hvor tager jeg, når
det er vinter, blomsterne, hvorfra
solskinnet
og Jordens skygger?
Murene står
ordløst og koldt, vindfløjene
klirrer i blæsten.

出典：Brød og vin og andre digte Oversat af
Thorkild Bjørnvig

人生の半ば

黄色い梨が実り
野バラが咲き誇り
その島は湖に浮く
愛らしい白鳥たちは
口づけに酔いしれ
その頭を
神聖で冷やかな水に浸す

ああ、冬になれば私は
どこに花や日の光や
大地の影を求めればいいのかろう？
壁は言葉なく冷たくそびえ
風見は風に吹かれて
カラカラと鳴る

(川原知巳訳)

作者紹介：Friedrich Hölderlin(1770~1843)

Friedrich Hölderlin(フリードリヒ・ヘルダーリン)はドイツの有名な詩人であり思想家でもある。ラウフェンで生まれ、父は尼僧院の説教師、母は牧師の娘であった。2歳の時に父を亡くし、その後ラウフェンを離れ、母の再婚によってニュルティンゲンに移る。9歳になろうとする頃に義父を亡くす。この第2の父が亡くなった時、彼の心は“それ以後離れることのない厳粛な気分をはじめて帯び、それは年とともに大きくなるばかりだった”と後に本人が述べている。彼の詩作には、死者の国のことを言い、死者たちに呼びかけるものが多いが、それは、彼の人生において父や義父など多くの近親者をあの世に送ったことと意識の底でつながりを持っていると考えられている。1788年にテュービンゲン大学に入学し、神学生として哲学を学ぶ。卒業後は、神職にはつかず、各地で家庭教師をしながら多くの詩作を行った。家庭教師時代に出会った最愛の恋人、ゴンタルト家の夫人ズゼッテを1802年に亡くす。その後徐々に精神を病み、1806年の夏ごろには異常な行動が目立つようになる。テュービンゲンの大学付属病院に8ヶ月の入院の末、自宅療養を言い渡され、その身は学芸に関心を持つ指物織の親方エルンスト・ツィンマーに引きとられた。ツィンマーは、誠実で律義な人間であり、ヘルダーリンの作品に感銘を受け、彼の優れた精神が病んでいくことを深く悲しんだ。知人の頼みから彼は自宅の一室でヘルダーリンの面倒をみることになる。こうしてヘルダーリンは、1807年夏からその死に至るまで36年間で塔の中で過ごすことになる。1843年に脳水腫のため亡くなった。

訳者紹介：Torkild Bjørnvig(1918~2004)

Torkild Bjørnvig(トーキル・ビャアンヴィー)はデンマーク人の作家、詩人。Århusで生まれる。1938年にÅrhus Katedralskoleの学生となり、その後Århus大学で比較文学の修士号をとる。1970年に政治家のBirgit Bjørnvigと結婚。デンマーク人女流作家のKaren Blixen:カーン・ブリクセン(1885~1962)と非常に近い交流があった。

作品解釈・批評

この作品は作者が心を病み始めた頃である1805年に作られた作品であり、全体を通して、美化された過去への思いと、未来への不安や恐れがうかがえる。1連は作者の中にある過去へのイメージであり、作者が理想とする世界を描いている。それは美しい白鳥たちのいる湖にある自然豊かな島。恋を象徴するバラの花が用いられていることから、亡き恋人ズゼッテとの日々へと思いを馳せているのではないだろうか。また、“白鳥たちは口づけに酔いしれ”とあるが、頭を水に浸す様子を水面とのキスとあらわしているのではないかと考えた。その水であるが“hellignøgtern”という2つの形容詞からなる単語に修飾されている。“hellig”は、“神聖な、聖なる”“nøgtern”は、“冷静な、無味乾燥な”という意味であり、作者の理想郷の中にある、幻想的で美しい湖の様子を表しているの

ではないか。このように1連では、作者の巧みな言葉によって、何とも美しい情景が浮かび上がる。

反対に2連では、題名でもある人生の半ばに立たされた今、作者が未来に対して抱える嘆きを詠んでいる。作者にとって先の見えない未来を季節の冬に例え、花や日の光や光が当たることによってできる影を得ることのできない悲しみを叫んでいる。ここで、1連に登場する花ともつながりがみられる。1連で描かれる理想の情景には花が咲き誇っているが、冬には、その花を得ることはできないのである。そして、壁がそびえるという表現は、作者が行く先を塞がれた様子を表し、壁は複数形でかかれており、いくつも存在し、八方塞がりな感じが感じられる。さらに風見がカラカラと鳴るという表現でむなしさと絶望感を演出している。

幼少時から不幸な出来事に襲われたヘルダーリンは、彼の人生において心の根底に常に存在する言い知れない不安や恐れを詩を通して詠んだのであろう。この作品にはそんな彼の嘆きや憂いがよく表れている。

参考文献

手塚富雄. 1985. 『ヘルダーリン（上）（下）』. 東京：中央公論社

参考資料

<http://www.litteratursiden.dk/analyser/bjoernvig-thorkild>

Søvn

Mens man sover, er den vågne verden klippet ud af universet med en skæv saks. Så ser man igen
som et dyr, husker med kroppen: Skyggerne, der vugger børnene i deres lange, tynde arme, en
motorvejsstrækning, der ligger øde hen. Hvis søvnen er tilstrækkelig dyb, sniger sjælen sig ind i
soveværelset og lægger sig nogle timer ved siden af kroppen. Som en svigtet kvinde, der forsigtigt
lægger armene om sin sovende elsker.

出典 : *Cirkler*, Borgen 1998.

眠り

人間が眠っているあいだ 目覚めた世界は、歪んだ鉄で宇宙から切り取られる
そして人は再び 体が覚えている獣のようなものをみる
長く細い腕で子どもたちを揺らす影 寂れて横たわる高速道路
もしも その眠りが心地よく深ければ 魂はひっそりと寝室にやってきて
体のとなりで しばらく寝転んで過ごすだろう
眠る恋人に そっと手を伸べる 打ちひしがれた女性のように

(中川真麻訳)

作者紹介：

Carsten René Nielsen はデンマーク出身、45 歳の詩人である。1966 年、デンマークの Slagelse 出身。1991 年からは、デンマーク Århus に暮らす。1989 年、22 歳にして詩集 *Mekaniker elsker maskinsyerske* でデビュー。これまでに 9 冊（1989～2008 年現在）の詩集を出版しており、散文詩集である *Cirkler*（円：1998 年）、*Clairobseur*（キアロスコーロ：2001 年）、*Enogfyrre dyr*（41 頭の獣：2005 年）、*Husundersøgelser*（家探し：2008 年）が含まれる。

1989 年には Michael Strunge-prisen を受賞。また、デンマークの国家芸術家基金（美術活動に対するもの）による助成金を数度認められている。2005, 2006 年には二人のスコットランド人作家 Anne Danovan, Rodge Glass と共に "Writers' exchange Denmark-Scotland" というプロジェクトに取り組んだ。このプロジェクトは Danish Cultural Institute, the Scottish Book Trust, Scottish Poetry Library によって支援された。2007 年には彼の散文詩の中から選ばれた幾つか、米国の詩人 David Keplinger によって英語翻訳され *The World Cut Out with Crooked Scissors* (歪んだ鋏で切り取られた世界) として出版された。

彼はまた、子どもや若者に向けて *efterskoler* や *højskoler*、*gymnasier* で作家ならではのワークショップを多く行っている。彼のホームページに記載されている連絡先にメールか電話で直接コンタクトをとり、講義の依頼等を行うことができる。

作品の解釈：

私は今回、1998 年に発表された詩集 "Cirkler" の中から *Søvn*(眠り) という詩を選んだ。この詩の最大の特徴はまず、一般に言われる詩の形ではなく、物語のように書かれる散文詩であるという点だろう。作者 Carsten René Nielsen は散文詩人として非常に高い評価を得ている人物である。しかし、この詩を翻訳するにあたり、韻を踏む単語や対比した表現を示すことが中々難しい散文詩というスタイルには悩まされてしまった。

この詩の翻訳・解釈を発表した後、ゼミ生の皆さんや田辺先生に指摘や意見を多数頂いたことで、新たな発見や考えを得ることができた。このレポートでは、主にその新しい解釈に重点を置きながら述べていこうと思う。

（１） 文法、日本語訳についての解釈

まず、一行目の主語である "man(人間)" について、この詩の主題でもある "眠り" とは私たち一人一人が持つものであると思い、最初の訳では "man sover(眠る)" を "あなたが眠る" と訳した。しかし発表後に頂いた意見を元に、この "man" は二人称のあなたではなくもっと私たち全体を表す大きな意味での主語なのではないかと考え直した。そこで今回の訳では "man sover(人間が眠る)" とした。次に三行目の "vugger" についてもゼミでの意見を参考に、"揺さぶる" から "揺らす" とし、きついイメージから少し柔らかい表現へと変更した。また、この

詩最後の一文については“forsigtigt(慎重に、用心深く)”の部分で“そっと”と訳したのだが、この“forsigtigt”という単語には本来なら慎重、用心深いといったどこか暗いこっそりとした意味、ネガティブなイメージが備わっている。しかし、あえて“そっと”という動きのみを表す情景的な訳をつけたことで、その後の“手を伸べる”という行為に対して読者がこの腕の持ち主の心情を深く考え、ある種の緊張感を感じとって貰えるのではないかと考えた。最後に“svigtet kvinde”の“svigtet”については、悩んだものの、“欺き、裏切り”といった本来の直訳より“打ちひしがれた”という、欺かれ肉体的な愛に破れた女性が抱える感情に重きを置いて表現した。

(2) 内容についての解釈

この詩は、前半の三行、後半の三行で大きく二つの世界観に分けられると考える。まず、“人間が眠っているあいだ”から始まる前半については、私たちがみる夢の世界を表現している。眠りにつく私たちの脳内は、現実世界から“歪んだ鏡”によって夢の世界へと移行し、そこで無意識の内に“体が覚えている獣のようなもの”に出会う。これは、私たちがもつ意識のもっと深いところ、深層心理のようなものであり、遙か太古から受け継いできた遠いヒトの記憶を表しているのではないだろうか。また、“長く細い腕の影”や“寂れて横たわる高速道路”という言葉からは、不安や寂寥、漠然とした恐怖感を感じる。私はこの表現から、夢から覚めた時の不思議な感情を思い起こした。私たちが夢から目覚めたときに、その夢の内容を覚えてはいないのだが、何か妙に寂しくなったり恐怖感を感じるということが起こるときがある。この詩の表現は、正にその、私たちが夢に対して感じる得体の知れない不安をうまく表しているのではないだろうか。

一方、後半部分では、眠りという行為により乖離していた肉体と魂が再び出会う。つまり人間が眠りから覚め、舞台が夢の世界から現実世界へと移るのである。ここで“眠りが心地よく深い”状態の肉体に対し、魂は“打ちひしがれた女性のように”振る舞う。肉体が充実し満足した眠りを得ているとき、魂は何か思い詰めた女性のように、そっと自身の身体に寄り添っている。この肉体と魂(=精神)の感情の違いとは、一体何を表しているのだろうか。私は、この“心地よく深い”眠りにつく肉体が、最早このまま目覚めたくないと感じているのではないだろうかと考えた。肉体が余りに夢の世界に惹かれ、深く眠ってしまった結果、魂は人間を永遠に眠らせなければならない。つまり魂が人間を死に至らしめるのではないだろうか、それも“打ちひしがれた女性のように”嘆きながら、“そっと手を伸べる”ように。

総括：

この詩を翻訳していくことで、最終的にみえた主題は夢と現実、肉体と魂の対比であった。前半では人間の眠りという行為の中にある混沌や無秩序を描き、後半では乖離していた肉体と魂が再び出会う現実世界を示しながら、その世界に戻ってこられるのか、それともそ

のまま永遠に眠り続けるのかというどこか切なく心苦しい余韻を残して詩を終わらせている。私はこの詩を自分なりに解釈していく中で、普段何も意識することなく眠りにつき、そして目覚めて...という毎日が、本当は不確かで、眠った私がまた目覚めるという保証は実際どこにもないのではないか？という奇妙な不安を感じた。無意識や自我、肉体としての自分と魂としての自分について考え込んでしまう、普段何も意識せずにいる部分をハッとつかれたようなそんな作品であった。

テキスト

Red. Lyngsø, Niels. 2000. *Digte fra 1990'erne. Antologi og encyklopædi*. Århus: Politikens Forlag A/S.

参考：

<http://www.carstenrenenielsen.dk/index.html>

http://en.wikipedia.org/wiki/Continuation_high_school

<http://www.kulturtidsskrifter.dk/>

<http://www.carstenrenenielsen.dk/english/georgiareview.html>

GENREBILLEDE

風俗画

Pagen højt paa taarnet sad,
Stirrede ud saa vide,
Digtet paa et Elskovskvad
Om sin Elskovskvide.
Kunde ikke faa det samlet,
Sad og famled
Nu med stjerner, nu med Roser—
Intet rimed sig paa Roser—
Satte fortvivlet saa Hornet for Mund,
Knugede vredt sit Væрге,
Blæste saa sin Elskov ud
Over alle Bjerge.

その小姓は高い塔の上で座っていた
とても広い範囲をじっと見ていた、
愛のうたについてうたっていた
愛の苦悩にまつわる。
それを集約したり、
落ち着かせたり、模索することはできない
今、星とともに、バラとともに—
何もバラとは韻を踏まない—
心を痛めて、口に角笛を当てた
刀を強く握りしめた
愛を強く吹き飛ばした
すべての山を越えて

出典：

"Digte til min elskede" 96 dansk
kærlighedsdigte

(藤岡愛実訳)

作者紹介：Jens Peter Jacobsen（1847～1885）

1847年4月7日、ユトランド半島北部の港町ティステッドの富裕な船主および石炭商の子として生まれる。9歳に植物学に熱中し早くもこの地方の全植物を知ったという。この自然科学への興味は生涯続く。16歳からコペンハーゲン大学に入学し植物学を専攻し、同時にゲーテ、シラー、ヴィーランドなどのドイツ作家の全作品を読む。18歳にシェークスピアを発見、耽読する。20歳頃に信仰の危機を迎え、キルケゴール、聖書、フォイエエルバッハ、ハイネなどの読書遍歴の末、無神論者となる。「苦しい内的戦いをへて、宗教を離れた」と後年述懐している。

イプセンの『ペール・ギュント』に感動し、自らも北欧のサガに題材をとって物語詩《コルマクとステンゲルデ》、詩と短編の組み合わせられた連作《サボテンの花ひらく》（これは未完に終わり、のちにアルノルト・シェーンベルクが『グレの歌』として曲を付ける）に着手、また長編小説『無神論者』の構想を得る。これが後の『ニルス・リューネ』となる。1870年、少し前から婚約していた〈ティステッドの王女〉と呼ばれる美少女との婚約を解消する。熱心なクリスチャンである彼女を自分の無神論と対決させるにしのびなかったとの理由による。

1872年《新デンマーク月刊》誌に中篇『モーンズ Mogens』を発表。また多年にわたる藻類の研究をまとめ、大学より金牌を受賞される。ただ沼や川での無理な採集がたたって、この頃から胸を病むようになる。1873年にはチャールズ・ダーウィンの『種の起源』、『人間の進化と性淘汰 (The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex)』の翻訳を進める一方、長編『マリリエ・グルベ夫人』のために図書館で古文獻の蒐集を行う。

療養をかねて、ドレスデン、ミュンヘン、プラハ、ウィーン、フィレンツェ、ローマを歴訪する。1876年の末に『マリリエ・グルベ夫人 Fru Marie Grubbe』刊行。これは十七世紀に実在した美貌の貴族女性で、国王の弟・姉婿の騎士・自家の下僕と男性遍歴を重ね、最後は渡船場の女将となったその生涯と内面を描いたものである。反響は大きく、諸外国からも翻訳の申し込みを受ける。1880年、病が重くなる中で奇跡的に『ニルス・リューネ Niels Lyhne』を故郷の家で完成させる。イプセン、ドイツの詩人リルケなどをも感動させたこの作で、ヤコブセンは神に反抗して詩作と恋愛で人間性を高揚させようとし、生きる根拠と目的を失いつつ信念を曲げない人物を創造し、〈無神論者の聖書〉と一部の人には呼ばれた。その後も短編『ベルガモの黒死病』『フェーンズ夫人』などを発表し、ヤコブセンは1885年に結核のため38歳の若さで死去した。

作品解釈：“GENREBILLEDE”（fra Digte til min elskede: 2007）

明確な段落で区切られてないので、大体の意味のまとまりごとに分けて解釈した。

・ 第1～2文

第1～2文目では、ある小姓が高い塔の上に座っており、そこから何か一点を集中して

見るのではなく、考え事でもしながらぼんやりと目の前に広がる景色をじっと眺めている光景が目には浮かぶ。

・ 第3～6文

ここで場面は変わり、小姓が作った詩の内容に移る。小姓は自分の愛する人のことを想って創作した詩を歌っていた。第5文～6文目に、「それを集約したり、落ち着かせたり、探したりできない」とあるが、これは自分の恋心が、文面によって言い表しがたいもので、自分の気持ちにぴたりと当てはまる言葉を探すことができないと言っているのが分かる。つまりこの時点で、この小姓は詩を文面として書いていないということが分かる。彼はあくまで歌によって気持ちを昇華したのである。このことは後の第9～12文目によっても裏付けられる。

・ 第7～8文

第7文目に「今、星とともに、バラとともに」とあるが、ここでの「星」はおそらく小姓が高い塔の上に座っていたのが夜であり、そこからぼんやりと見える星のことを言っているのではないと思われる。一方「バラ」であるが、バラは西洋において古来より愛の象徴であり、ここでもその象徴の意味を当てはめるならば、小姓の、想い人に対する愛を指していると考えられる。そうすると、次に続く「何もバラとは韻を踏まない」というのは、小姓の気持ち、すなわち愛に言い換えられるものはなにもないということを意味していると想像がつく。先ほどの第5、6文目と重複する内容になるが、愛が何物にも表現しがたいものであったということが伺える。

・ 第9～12文

第9文目であるが、“sætte”が“hornet for Mund”にかかっており、訳は「心を痛めて口に角笛をあてた」となる。次の「刀を強く握り締めた」は、愛が成就しなかったときの悲しみ、胸の痛みをぐっところえている様子が分かる。第11文目の「それから愛を吹き飛ばした」は、受け入れてもらえなかった愛を、第9文目で登場した角笛によって、最終文に続く「すべての山を越えて」吹き飛ばす、ということになる。要するに、小姓の恋心はかなわず、どうにもならないやるせなさをどこかへやってしまいたいという気持ちで、愛を遠くへ吹き飛ばしたのである。

まとめ

この詩を初めに目を通したとき、正直に言うとあまり意味がわかっておらず、興味本意で解釈をすすめていくとかなり難解なものであったことが判明し、誤訳だらけの支離滅裂な訳をつけてしまった。ゼミの授業の中で田辺先生が指摘してくださった点や、トーマスの手助けもあって、やっとこの詩の意味が理解できた気がする。

この詩は恋に破れた小姓のやり場のない悲しみをうたったものであるが、ヤコブセン自身も、自らの無神論を貫くために熱心なクリスチャンである恋人との婚約を破棄した過去があり、その際これと似た感情を抱いたのではないかと私は思った。信仰の違いさえなければ幸せになっていたはずの二人であるのに、どうしても曲げることのできない自分の信念のために、愛を犠牲にしたヤコブセンの胸の苦しみは相当なものに違いなかっただろうと思った。

最後に、詩のタイトルである「風俗画」との関連であるが、「風俗画」が「日常の風景」を意味するように、失恋によって味わう喪失感や誰かが経験するもので、世の常であるということを表していると解釈した。

誰もが何かに強く憧れ、求めながらも、それが決してみたされないまま終わっていく、そんな北欧的な寂しさを、上手く表現している作品だと思った。

テキスト

Gyldendal. 2007. “Digte til min elskede” 96 dansk kærlighedsdigte. København

参考文献

<http://ja.wikipedia.org/wiki/>

(DSO) Danmarks Støste Online Ordbog. <http://www.ordbogen.com/>

第 1 部 ・ その 2

デンマーク 編

Den blomstrende have における Mette の人物像と役割についての一考察

今川陽介

1. はじめに

この物語には主に三人の登場人物が存在する。主人公であり、作中で語り手を務める Thomas と友達 Erik、いとこの Mette である。彼らの言動から Thomas と Erik は少年期から思春期への移り変わりの時期であり、Mette は二人よりも少しだけ年齢が上であると考えられる。物語は Thomas と Erik を中心にして展開していくが、Mette の存在は作品の構成において、必要不可欠なものとなっている。なぜなら、作者はこの Mette を通して、少年二人が変化していく様とその対比を描いているからである。ここでは特に Mette に着目し、彼女がこの作品においてどのような人物として描かれ、そしてどのような役割を担っているのか、作品構成にどのような影響を与えているのかについて考察していく。

2. Mette の特徴

まず初めに、Mette は作中においてすべて第三者視点で描かれていることに着目したい。彼女は Thomas や Erik とは違い、会話や発言の描写が一つもない。彼女の行動や見た目の描写は語り手である Thomas か Erik を通して表現されているのである。したがって、Mette が実際はどのような女性なのか、性格や実際の行動の真偽は正確にはわからない。なぜなら、Mette の描写は Thomas と Erik の Mette への感情が含まれていると考えられるからである。また、当然 Thomas と Erik の Mette に対する見方や描写は異なっており、そこに Thomas と Erik の対比、及び Mette の役割を見出すことが可能であると考えられる。まずは、Thomas から見た Mette と、Erik から見た Mette がどのように異なっているかについて、本文中の例を挙げながら考察していく。

3. Thomas 視点からの Mette の表現

Thomas の Mette に対する表現は以下のようなものが見られる。

”min kedelige kusine(僕の退屈ないところ)、hendes kraftige skinneben(彼女のたくましいすね)” (p.1,l.8)、”tykke brilleglas(厚い眼鏡)” (p.1,l.14)、”en hårlok(ほつれ髪)” (p.1,l.15)、”underlig(変な)” (p.2,l.26)、”så GRIM(とても醜い)” (p.2,l.31)、”man får sgu da kvalme bare ved tanken om hende(彼女のことを考えただけで吐き気がする)” (p.2,l.32)、”midebleg og fed(嫌に青白く太っている)” (p.3,l.12)、”siger hun oven i købet aldrig en lyd(全く言葉を発しない)” (p.3,l.16)、”Det vendte sig i mig. Mettes tunge.(ぞっとするよ。Mette の舌なんて。)” (p.4,l.11)

これらの例からわかるように Thomas は Mette に対して、少なくともいい印象は持っていなかったことは明らかである。ましてや恋愛の、または異性的な対象として彼女を見ることはなかったと思われる。Thomas にとって Mette はダサくて気持ちの悪い、ただのいとこといった印象であつたと考えられる。これが Thomas 視点からの Mette の人物像である。

4. Erik 視点からの Mette の表現

次に Erik の Mette に対する表現は以下のようなものが見られる。

”jeg ved ikke rigtig...(良くわからないけど...)” (p.2,l.28)、”jeg får sgu ondt i maven hver gang jeg ser hende...(彼女を見る度にお腹が痛くなる...)” (p.2,l.29)、”Det (Mettes hår) er enormt blødt...meget blødere end vores...(彼女の髪の毛は俺たちのよりも遥かに柔らかいんだ...)” (p.4,l.15)、”Det er sgu rigtig bøger, du, voksenbøger altså, romaner og sådan noget...(Mette の読んでいる本は、なあ、大人の本なんだぜ。恋愛小説とか、そんなやつさ...)、Sikke hans brune øjne skinnende, feberblanke og våde. (彼の茶色の瞳はなんて輝き、熱を帯び、潤っているのだろう。)”(p.5,l.23)

これらの例からわかることは、Erik は Mette に対して、恋愛感情とまではいかないが、彼女を女性として意識していたということである。Thomas とは違い、Mette を自分とは性別の違う、何か惹きつける力を持った異性として認識していたのである。これが Erik 視点からの Mette の人物像であり、Thomas のものとはかなり像を異にしているのを見て取ることができる。

5. Mette の人物像

では、実際 Mette はどのような女性なのであろうか。先ほども述べたように、Thomas からしてみれば「気持ち悪い」人物である一方、Erik から見れば「女性的な魅力を持った」人物でもある。ここで、二人の彼女に対する評価は真っ向から対立しており、なかなか Mette という女性の人物像がつかめてこない。しかし、この対立は Mette という人物に対する一元的な解釈によるものである。つまり、この矛盾は Thomas と Erik が Mette の同一部分を描写していると仮定したために生じたものである。もし、彼女に対する Thomas の描写も Erik の描写も、Mette を正確に描写できているのであれば、二元的に Mette を理解することによってこの二人の描写は矛盾なく解釈可能である。つまり、Thomas は Mette の外面を、Erik は内面をそれぞれ描写しているのである。たとえば、Thomas は Mette の体格や顔、髪の毛といった外見的なものに対して「気持ち悪い」と表現しているのであり、内面に関してはほとんど触れていない。逆に Erik は、彼女の読んでいる本やキスの経験、彼女の醸し出す雰囲気を「魅力的である」と表現しているのである。少年二人はまったく違った視点から彼女を見ているのである。つまり、Thomas の Mette に対する描写を内面的人物像として解釈し、Erik の Mette に対する描写を内面的人物像として解釈することにより、Mette という一人の人物を解釈することが可能である。したがって、Mette は外見こそ美しくなく、一見すると地味な女の子であるが、内面に目を向けると、大人びた魅力のある女性である、ということになるであろう。

6. Mette の役割

そして、この二人の異なった視点を考察することにより、Thomas と Erik における大きな

対比構造を見出すことが可能である。それが思春期における対比であり、この物語のテーマでもある。また、Thomas と Erik 各々の思春期に入る時期の違いや、彼ら二人の間に出現する大きな差異を浮き立たせることこそ、Mette がこの作中において担っている役割の一つであると考えられる。つまり、Erik が Thomas より先に思春期へと入っていくという事実を、Mette という存在が浮き彫りにしているのである。

Thomas と Erik は親友であり、ただ無邪気に少年らしく日々の生活を送ってきた。しかし、何事もなかった二人の関係に違和感が生じ始める。それが Mette の存在である。Thomas は先述の通り、彼女のことをまるで気にかけておらず、女性としても意識はしていない。しかし一方で、Erik は彼女に女性的な魅力を感じ始める。これが Thomas と Erik を分け隔てる思春期という壁であり、Mette はこの思春期を象徴する登場人物でもあると解釈することができる。なぜなら、Mette と関わりを持とうとしない Thomas よりも、説教区的にかかわりを持っていった Erik の方が早く思春期に入っており、Mette との関わりが思春期の始まりを暗示していると考えられるからである。Thomas は Erik に対して劣等感のようなものを感じ始めるが、その壁を超えることはできない。それは Thomas がまだ思春期手前の状態だからである。これは以下の描写に如実に表れている。

“Jeg følte mig vred og gal og lille og dum. Hans nøgne ryg foran mig, den så pludselig stor og fremmed; jeg kunne ikke bare vælte ham omkuld i grøften og hviske sjofle vittigheder ind i hans tinding, mærke duften fra hans hår: salt og sej og fuld af blæst og skyer.(僕は自分が怒っていて、狂っていて、少しばかな様に感じた。彼の裸の背中が目の前にあり、突然大きくて異質なものと見えた。僕は彼をぐらつかせて溝に落とすことも、こめかみに卑猥なジョークを言うこともできなかった。彼の髪の毛からは塩や、風や雲が満ちたような匂いがした。)”
(p.4,1.22-25)

これは Erik と Mette がキスをした次の日の場面である。この Thomas と Erik の描写からわかるように、数日前までははっきりとは認識することができなかったこの二人の差が、この場面では明瞭に表現されている。これは明らかに Erik が Mette とキスをしたことにより、思春期へと入っていったことを表している。Mette という存在が Thomas と Erik の精神的発達の、思春期的な違いを作りあげているのである。Mette に対する Thomas と Erik の反応の違いに、まだ思春期に入っていない Thomas と、すでに思春期に入った Erik の対比をはっきりと見ることができる。

Mette のもう一つの役割は、思春期が持つ二面性を可視化することであると考えられる。前述したように、Mette は思春期の象徴として描かれており、Thomas は Mette を気持ち悪いものとして捉え、Erik は憧れの対象や魅力的な存在として Mette を捉えていた。ここに、思春期の二面性、特に少年が持つ思春期に対する二面的な感情を読み取ることができる。Thomas が感じたように、思春期にはどこか奇妙な、気持ち悪い一面がある一方、Erik が感じたような憧れの面も存在する。普通これらの二つの感情は一人の少年の中で複雑に絡み合っており、目に見えない分、簡単に認識することはできない。しかし、作中では思春期に対するプラスの感情とマイナスの感情をそれぞれ Erik と Thomas が担っており、非常にわ

かりやすい対比構造として描写されている。二人の **Mette** に対する言動や感情が、そのまま思春期に対する彼らの感情と重ね合わせられながら描写されているのである。

7. おわりに

これまで考察してきたように、思春期の象徴であると考えられる **Mette** に対して、**Thomas** は気持ち悪いというマイナスの感情を抱き、**Erik** は憧れというプラスの感情を抱いている。それらの感情は、**Mette** の外面と内面の人物像と対応しており、また思春期自体に対する感情とも重なっている。つまり、**Mette** の外面的な描写が思春期に対するマイナスの感情を、内面的な描写が思春期に対するプラスの感情をそれぞれ表現していると考えられる。思春期という抽象的なテーマを人物描写と重ね合わせることによって、表現しているのである。このように、**Mette** の人物像とその役割にこの作品のテーマでもある思春期という概念を考察することが可能である。

テキスト

Red. Ammitzbøll, Lise. Østergren-Olsen, Dorte. Poulsen Henrik. 2007. *Vild med dansk 7*. København: Gyldendal.

1. 作者紹介

Kim Fupz Aakeson (キム・フップス・オーケソン) 1958 年コペンハーゲンに生まれ、1984 年に児童書の”Hvem vover at vække guderne”で作家デビューした。それ以前はフリーランスのイラストレーターとして新聞にイラストを寄せており、画家としていくつかの画集も出版している。文学や絵画だけでなく映画にも関心を寄せており 1996 年に映画学校を卒業してからは、脚本も手がけるようになった。代表作に Sussane Bier 監督作品”Den eneste en”がある。彼自身は教育や児童心理についての専門家ではないが、作品には子供や思春期の青少年を読者として据えるものが多い。それゆえ言葉選びも平易で読みやすいものとなっている。現在も多方面で精力的に活動しており、さらなる活躍が期待される作家である。

2. 作品紹介

“Alting og Ulla Vilstrup”は 1998 年の作品である。2006 年には Kenneth Kainz 監督により”Rene Hjerter”というタイトルで映画化され好評を博した。主人公は 19 歳の少年。(以下「僕」と表記する)

「僕」は 19 歳の少年。社会生活との調和とれず、施設で暮らしている。「僕」には大切なものがあつた。それは映画”Hjerterfri”で、主人公の Linda という女性だった。「僕」にとって Linda は、家族よりも友人よりも、その他がどうでもいいと思えるほど何よりも大切な存在で「僕」は日に何度も Hjerterfri を見る。映画を通じて Linda が「僕」に語りかけてくれるのを聴くのだ。そんな生活が 14 歳のときから続いている。「僕」にとって必要なことはすべて Linda が教えてくれる。だから生き延びていられるのだとさえ「僕」は思っていた。

ある日、施設で職員のまぬけ J とお馬鹿 H (僕はそう呼んでいる) にからかわれたことをきっかけに、Linda は映画の中だけの人物で Ulla Vilstrup という女優が「演じて」いるのだと知る。考えてもみなかった事実を知らされ衝撃を受けるが、Ulla Vilstrup がコペンハーゲンに住んでいると聞くと、彼女に会いに行かなくてはならないと「僕」は思うのだった。力強い唯一の友人 Willy とともに「僕」は施設でばや騒ぎを起こし脱走する。すべては Linda に会うために。

3. 考察 - 「僕」の世界観の転換を追う-

本作は一言でまとめると、「僕」の気づきの物語である。Ulla Vilstrup との対面が「僕」の世界観を変える。それまで気づいていなかった物事を理解し、違った視点から映画 Hjerterfri を解釈し、Linda の言葉が持つ本当の意味がわかるようになる。本作ではその過程が「僕」の視点から一人称で語られている。今回は、世界観の転換に至る以前「僕」の思想とはどんなものであったか、なぜどのようにして変化したのかテーマに据えて考察を進めることにする。

① 主人公「僕」について

施設で暮らしていることや、Hjertefri の Linda への固執の仕方から「僕」は何かしら精神的な問題を抱えていることが窺い知れる。作中には家庭や学校で問題を起こしてきたことの描写もある。「僕」の頭の中では、世界は”godt”と”ondt”の二つの要素に分かれていて、あらゆる物事に対して「良い」か「悪い」かの判断基準しか持っていない。加えて「僕」はこの”godt”と”ondt”—相反する二つ—が同時に存在することは我慢ならない。「僕」の世界観は非常に一元論的な構造をもっている。

本文 23 ページ 23 行目より、ノアの方舟を読み、「非現実的だ。気に入らない」と言う場面において

”Og det mest irriterende ved Noahs Ark, det er at han osse tog de onde dyr, han tog giftige slanger med om bord. Jeg mener bare, når nu man har chancen, så tager man da ikke giftige slamger med, de kunne da drukne og så var man fri for alle dem.”

(そして、「僕」がノアの方舟で一番いらいらするのは、ノアが「悪い」動物も捕まえたことだ。彼はあくどい蛇を方舟にのせた。「僕」は、チャンスがあるんだったら、あくどい蛇なんて一緒にのせないで、海に沈むようにすればいい、そうしたら、蛇から自由になるのにと考えた。)

本文 5 ページ 17 行目より

”Nogen gang drømmer jeg om hvordan alting ville være hvis der kun fandtes ting som Linda og Willy og Poul. Eller at tingene fandtes to forskellige steder, sådan at Dumme J og Dumme H og Psykologen var på et sted, og man så bare kunne gå udenom og hjem til det sted hvor alle de gode ting er. Eller man kører i en bus, og først kommer det dårlige stoppested, og man bliver bare siddende og lader som ingenting mens de dumme og onde står af, og så kører man videre, og alle er helt lettede og griner, og så kommer de gode stoppested. Det ville være dejligt. Mon ikke.”

(「僕」は時々、もし Linda と Willy と Poul だけしか存在しなかったら、すべての物事はどうなるんだろうかと想像する。それか、物事が二つの違う場所に存在したらということ。Dumme J と Dumme H と精神科医がある場所にて、そこを回り道すれば、すべての「良い」ものがある場所へ通じている。もしくは、バスに乗っていて、はじめに「悪い」バス停に到着する、「悪い」奴らが降りる間、素知らぬ顔で座っていて、さらに先へ進むんだ、みんな安らかで笑っていて、「良い」バス停にいくんだ。すべての物事が良くなるだろう。だけど、現実はどうじゃない。)

蛇は悪い生き物だから海の底に沈んで絶滅してしまった方がいいんだと思う「僕」、それゆえノアの行動はまったく我慢ならない。「僕」の一元論的世界観に於いて、「悪い」ものはいなくなってしまった方が良いもので、すぐに目の前から消し去ってしまいたくなる。

現実の人間関係でも同じで、かつて学校に通っていた頃、級友の悪巧みに引っかかってからかわれたとき、「僕」はその級友を椅子で打ちのめしてしまった。

62 ページ 27 行目より

”Så var det at jeg slog ham med en stol.”中略”Jeg syntes ikke det tæller dårligt for mig at jeg gjorde det, det er ikke at gøre andre fortræd når de selv her været så meget ude om det.”

(そして「僕」がやったのは彼を椅子で叩くことだった。) 中略(「僕」のやったことが「僕」のせいになると思わなかった。奴らが自分で招いた出来事である場合、他人を傷つけたことにはならない。)

「僕」をからかって遊ぶ級友を椅子で殴ってしまうが、それは「僕」のせいではないと考える。相手に原因があるときは、自分は悪くないのだと「僕」捉えているからだ。相手が「悪い」なら、その対極の「僕」は「良い」の方に押し込まれるのである。「僕」と母親の関係も同じ構図で語られる。クリスマスイヴの晩に、母親からオーブンのチキンの火加減の番を頼まれるが、「僕」は失敗してしまう。口汚く「僕」を罵る母親をフライパンで叩いて黙らせる。

71 ページ 7 行目から

“hun slog efter mig med sine hænder, hun skældte mig ud og sagde jeg var uduelig, at jeg var et fjols. Hun råbte osse andre ting, som var meget grimmere,...”中略“og det var som om det var en helt fremmed og meget grim dame der var kommet ind i min mor. „Ingenting duer du til, du er et misfoster!” Og så var det at jeg rakte ud efter stegepanden og slog hende over munden, og det var ikke fordi jeg slå min mor, det kunne ikke falde mig ind, det var fordi jeg ville få den grimme dame til at tie stille.”

(母さんは手で「僕」を叩いた、「僕」への不満を漏らしながら役立たずだ、馬鹿だと言った。彼女はまた他のことも言った、まるでひどく醜くなったみたいだった。中略 全く知らない人みたいで、母さんの中にひどく醜い女の人が入ってしまったみたいだった。「おまえは何の役にも立たない、出来損ないだよ!」そして「僕」はフライパンに手を伸ばし母さんの口を殴った。母さんを殴りたかったんじゃない。そんなことこれっぽっちも考えてなかった。ひどく醜い女の人を黙らせたかったんだ。)

「僕」が自制心なく他人を傷つけてしまうことや、そのことに関しての自責や自省がない様子が浮かび上がってくる。

□ 「僕」の言葉の認識について

「僕」は Linda を自己に投影する。自己を映画の登場人物に投影するのであればよくあることなのだが、「僕」は Linda を自己に投影しているのだ。ゆえに、自己の行動は常に

Hjertefri のシーンに置き換えられ、Linda とシンクロする。作中の場面では、施設からの逃亡に火を使うアイデアや、Willy が警察に捕まる場面、タクシーに乗る場面、ガソリンスタンドでプルサを得る場面など随所に見られる。その他にも「僕」と Willy の関係が Linda と Vera に投影されている。

「僕」が Linda から大きな影響を受けている証として、何度も登場する Linda の言葉がある。

“Livet er hvad man gør til.”

(人生は己の行動によって作られる、人生は自分で行動して作り上げていかないといけないものなのだ)

“Hvis ikke man kan tåle lidt modgang, så egner ikke til at lave.”

(わずかばかりの苦勞に耐えることができなければ、生きる価値がない)

“Huske at elske.”

(愛することを忘れないで)

「僕」が Ulla Vilstrup に会うために施設を抜け出すと決めたときも、

45 ページ 19 行目より

“Linda findes som Ulla Vilstrup. Og livet er hvad man gør til.”

(Linda は Ulla Vilstrup として存在しているんだ。そして、人生は自分で行動して作り上げていかないといけないものなのだ)

Linda の台詞が動機となり、逃走後、狭いトレーラーハウスで眠るときも、

59 ページ 8 行目より

“Jeg rejser mig op i skurvogenen og siger det samme : Hvis ikke man kan tåle lidt modgang, så egner ikke til at lave.”

(「僕」はトレーラーハウスに入りながら「わずかばかりの苦勞に耐えることができなければ、生きる価値がない」)

このように「僕」は常に Linda の台詞に影響されている。頻繁にキーフレーズが差し込まれながら物語が進んで行く。

“Huske at elske.”に関しては、Linda をかばって死ぬ親友の Vera が残した言葉であり、Hjertefri という映画の中でもっとも重要な台詞であるが、この時点では「僕」の口からはあまり語られないものとなっている。

□ラストシーンについて

Willy を失い一人になってたどり着いた目的地、Ulla Vilstrup は「僕」の思い描いた Linda ではなかった。年老いた婦人で、とても Linda だとは思えない。それでも、自分が Ulla だという彼女に耐えられなくなり、ついにフライパンで殴ってしまいたくなる。そのとき、弱々しい老婆の口から、

“Hvis ikke man kan tåle lidt modgang, så egner ikke til at lave.”

(わずかばかりの苦勞に耐えることができなければ、生きる価値がない)

との言葉がでる。その瞬間「僕」はすべてを理解した。

97 ページ 29 行目より

“Her er det at noget knækker inden i mig. Det er laver af glas, og jeg har ikke mærket hvor nemt det har det med at knække, ikke før nu.”

(「僕」の中で何かかが砕けた。それはガラスでできていて、「僕」は今までそのもろさに気づいてなかった。)

自分の愚かさに気がつき、後悔と反省の念が押し寄せてくる。世界は最早、“godt”と“ondt”のみでなく、「良い」と「悪い」が背中合わせで共存しているのだと悟る。「僕」のそれまでの世界観は転換し、バラバラに捉えられていた言葉が文脈を得て統合する。

“Livet er hvad man gør til. Men hvis ikke man kan tåle lidt modgang, så egner ikke til at lave. Så vi må huske at elske.”

(人生は自分で行動して作り上げていかないといけないものなのだ。だがしかし、わずかばかりの苦勞に耐えることができないならば、人生はすぐに生きる価値がないもの担ってしまう。だから、愛することを忘れないことが大切なのだ。)

「僕」が今まで「自分の人生を自分で作り上げずに、Linda の投影の中で生きていたこと」、「わずかばかりの苦勞を我慢せず、他人を傷つけていたこと」、「なにより、他人への共感や愛を欠いていたこと」。Willy を見捨てて逃げたこと。今まで数えきれないほど繰り返し Hjertefri をみて Linda が「僕」に教えてくれたと思っていたことはすべて、表面上の理解にすぎなかったのだということや、「良い」や「悪い」だけではないことが一気に理解できるようになった。Ulla の言葉によって。その後、「僕」は Ulla と一緒にソファに座って Hjertefri を見る。Ulla と手を握り合ったり、キス乞うたり、映画の曲を口ずさんだり、笑い合ったりしながら過ごす。まるで別人になったようにも感じる。

102 ページ 15 行目より

“Og så siger man at verden ikke er hvad den har været.”

(これまでの世界と違う世界っていうやつだ)

映画が終わりきらないうちに警官が訪ねてくる。「僕」は反省から警官に従う気持ちがあるが、映画の終わりを見届けたいと思う。Ulla の協力もあって、どうにかラストシーンまで見ることができた。映画のラストでは、Linda が金持ちの産業界のプリンスとの婚約のお披露目パーティーの最中に、Vera の“Huske at elske.”という言葉を読み出し、自分の人生を生きるために去るという場面になっている。「金と成功」を捨てるのかという問いかけに対し、Linda が憤然と

105 ページ 4 行目より

“Hvis det er naivt at tro på kærligheden, så lad mig være naiv, hvis det er naivt at følge sit hjerte, så lad mig være naiv, hvis det er naivt at elske, så lad mig være det mest naive menneske i hele verden...”

(愛を信じることをナイーブだと言われるなら、私はナイーブなままで良い。心

を感じる事がナイーブなら私はナイーブなままでも良い。愛することがナイーブなら、私は世界一番ナイーブでいい。)

言い切りパーティーを飛び出す。そこまで見終え、警官とともにパトカーへ乗り込む。連行されながら、「僕」はノアの方舟について思い出す。

108 ページ 1 行目から

“Måske var det sådan at Noah tænkte om slangerne. Han tænkte måske at man ikke bare kan tage de rare dyr, dem der er dejlige at ae, han tænkte måske at alting hører med. Og jeg vil ikke sige at bestemme hvem der skulle om bord på min ark, men jeg vil sige at jeg forstår ham bedre lige nu end jeg nogensinde har gjort. Og derudover skal man bare huske at elske.”

(ノアは蛇についてこう考えていたのかもしれない。彼は心地の良い「良い動物」ばかりをのせるのではなく、すべてに耳を傾けようと考えたのかもしれない。「僕」は特定の誰が「僕」の方舟に乗るべきだと言いたくない、けど、ノアがかつての「僕」より「より良い」存在であったとわかったと言いたい。それに加えて、愛することを忘れなければ良いんだ。)

このように「僕」の「良い」と「悪い」で分裂していた世界は、Ulla の言葉によって統合し、「僕」の世界観は転換した。きっかけはたった一言の台詞だが、それが、「僕」のすべてを変えてしまった。最後に、「僕」は映画の主題、“Huske at elske.”にたどり着いたのだ。

□小説の中の映画、二重構造

本作の特徴的な点は、小説のなかに映画が入り込んでいるという点である。いわば、小説の中に一本の映画が内包される、二重構造となっているのだ。読者は、「僕」の視点を通して、“Alting og Ulla Vilstrup”という小説を読みながら、同時に、“Hjertefri”という映画も「僕」の目を通してではあるが、見ることになっている。「僕」を理解するために欠かせない映画のストーリーが、現実のシーンに挿入され、読者は断片的に現実と映画の世界を追う。おのおのの断片は、Linda と「僕」のシンクロによって結びつけられる。

□映画版と小説版の相違、対象とする読者、視聴者

小説から映画化されるにあたって、いくつかの変更が加えられている。主人公「僕」の名前が Kriss となっており、視点が小説版の一人称から映像化の特性上の都合で、三人称になっている。これにより、ストーリーを外から見つめる視聴者の目加えられ、小説版の「僕」と読者の投影の結びつきは弱まり、客観性が加わっている。また、役者えらびの都合上からか Kriss の年齢が 19 歳ではなく 28 歳へなっている。「僕」の一元論的世界観を表現するのに反対色である「赤」と「緑」の食べ物が一緒にあるのが嫌うシーンや、Ulla Vilstrup の孫を Linda とオーバーラップするシーンなど映像ならではの視覚的表現が効果的に用いられている。映画としてのエンターテインメント性を出すために、少々派手な演出も加えられた。Kriss や Willy が撃たれるのは映画版のみ。

しかし、最大の相違点は、映画版では「僕」(Kriss) のビデオにラストシーンが欠けてい

るということである。ビデオは Linda が鏡に向き合い頭に銃を突きつけてゆっくり目を閉じるシーンでいきなり終わっている。続きがあると知らない「僕」は、Linda がどうなったのか気になって仕方がないが、彼女は引き金を引いて死んだと母親から教えられ、「悪い」世の中で苦しむ「良い」人間である Linda を救ってあげなくてはと思うのである。Ulla Vilstrup に対面し始めて、映画の続き（産業界のプリンスとの婚約パーティーを抜け出し、新しい人生を始める）を彼女の口から聞かされる。そこでやっと、「僕」の世界は統合するという仕立てになっている。「僕」のその後は小説同様に知れないが——特に警官の特殊部隊に狙撃される映画版では生死すら不明である——が、ラストシーンの Linda のヒロイックな爽快感のある旅立ちの余韻から悪い想像は起こらない。しっかり”Huske at elske”が染みる。

4. まとめ

本作の読者層として、青少年が据えられている。“Huske at elske”このテーマは普遍的であるが故に、ありがちで月並みだと捉えられかねない。とくに青少年にとっては。また、ありふれているが故に、非常に伝わりにくい。だが、小説の中の映画、この二重構造によって「僕」と読者の距離はぐっと近づき追体験の共感性が増す仕組みになっている。「僕」が全く登場せず、Linda の Hjertefri というストーリーだけで二重構造が解かれていたら読者は退屈してしまうだろう。

この追体験の経験は、言葉の認識や理解に伴う経験の重要性を知る機会を与えている。読者の青少年が、今後の読書に於いて出会った言葉や普段見聞きする言葉の裏側や表面上でなく真の意味を捉えるきっかけとなっているのだ。”Alting og Ulla Vilstrup”が、読者に今後の読書の幅の広がりを与えている点を評価したい。

テキスト

Fups Aakeson, Kim. 1998. *Alting og Ulla Vilstrup*. Gyldendal.

参考文献

Red. Ammitzbøll, Lise. Poulsen Henrik. Østergren-Olsen, Dorte. 2008. *Vild med dansk 8*. København: Gyldendal.

授業レジュメ、共同訳文

1. はじめに

本作品で主要なテーマとして扱われている、Thomas と Erik という思春期の 2 人の成熟度の違いに、年上の Mette という存在がどのようにかかわっていたのか考えてみたい。また、全体をより深く掘り下げるために、ストーリーを簡単に追いながら、いくつかの観点にわけて分析し、読み解くことを試みた。

2. 作者紹介：Naja Marie Aidt(1963-)

デンマーク人の詩人、作家であり、1963 年 12 月 24 日、グリーンランドに生まれ、グリーンランドとコペンハーゲンの vesterbro の両方で育った。1991 年に詩集“Så længe jeg er ung”でデビュー。2006 年に出版された短編集“Bavian”では、Kritikerprisen(批評家賞)と Nordisk råds litteraturpris(北欧議会文学賞)を受賞した。詩、小説ともに人がどのように共生するのか、コミュニケーションするのかなどを取り扱っている。また、不倫、病、死、暴力、恐れ、性、愛など重いテーマを描くことが多い。詩集“Alting blinker”では亡命への支援を背景とするテーマを扱っており、これは幼少時をグリーンランド、思春期と青年期をデンマークで過ごし、現在ニューヨークに住む自信の経験に基づくものである。

3. 作品解釈

この作品を解釈するにあたって、全体を 4 つの場面に分けて分析していきたいと思う。

3-1. 冒頭

物語は、美しい情景描写と共に始まる。ここでは主に、題名にもなっている blomstrende have についての描写がなされている。そしてすぐに物語の主な登場人物である Thomas, Erik, Mette の 3 人が登場する。

3-2. Thomas, Erik, Mette の関係

ここで Thomas, Erik, Mette の関係を整理してみると、Thomas と Erik は親友であり、Mette は Thomas の従姉妹である。

まず、Thomas と Erik の関係であるが、夏休みに Thomas が Erik を、家族と過ごす別荘へ招くほどの仲であり、一緒に泳ぎに行ったり、岬の方へ出かけて行ったりと無邪気に仲よく遊んでいる様子が多々描かれている。“Vi var begge blevet fjorten år i foråret, Erik lidt før mig.”という文から分かるように 2 人は共に 14 歳であり、Erik の方が Thomas より、少し早く 14 歳になったとある。おそらく長い間少年時代をともにし、ずっと無邪気に 2 人で遊び続けられるかのように思えた 2 人の間にも、14 歳という多感な年齢ゆえに、青年へと移り変わる中で成熟度の違いが生じてくる。いわば、Erik の方が先にませてしまい、大人への一

歩を踏み出すのである。この文はこの先描かれる 2 人の間のずれを暗示する最初の 1 文と言えるだろう。他にも Erik が Thomas の先に行く描写が見られる。以下の文は、2 人が岬までどちらが先に着くか競争する場面のものである。

Vi løb synkront og vandt begge to.(僕たちは同時に走って、2 人とも勝った。)

synkront や begge という単語が用いられ、この時点では 2 人の間に差異がないことを表している。ところが、その少し後には、

Erik grinede med overgang i stemmen og vi gled i det glatte ler.

(エリックは声変わりしつつある声で笑い、僕たちはなめらかな粘土の上をすべり歩いた。)

とあり、思春期の象徴とも言える声変わりという表現を用いて Erik の成長の早さを表している。

物語前半において、2 人は一見すると、いつも一緒に遊んでいる仲の良い少年たちという様に描かれているが、その中に少年期から青年期へと移りゆく中での、あいまいであやふやな関係性が見え隠れしている。

次に Thomas と Mette の関係であるが、以下の描写から読みとることができる。

(...)min kedelig kusine Mette, hendes kraftige skinneben under bordet.

(ぱっとしない僕の従姉妹 Mette、彼女のたくましいむこうずねが机の下にあった。)

上記の文が物語において初めて描かれる Mette 像である。語り手は主人公の Thomas であるからして、彼が Mette のことを、少なくともよくは思っていないことが読みとれる。また彼女は、“Du er sørme en vaskeægte læsehest, hva’ lille Mette...”(お前は本当に本の虫だなあ、Mette ちゃん)と祖父に言われるほど、常に本を読んでおり幾分ミステリアスな存在として描かれている。後に出てくる 2 人がマットレスの下に隠していた Asterix シリーズや、Mette が読んでいる本について Thomas と Erik が推測する場面から伺えるように、この物語において本は大人を象徴するものであると考えられる。

一方、Mette から Thomas への気持ちをはっきりと読み取れる箇所は存在せず、Mette は Thomas のことをなんとも思っていないようである。あえて Mette の考えを明確にしないことによって Thomas や Erik からみた、大人の余裕や世界の違いを表しているとも考えられる。

3－3．Thomas と Erik の間に生じるずれと Mette の存在

何事もなく進んでいくかのように思われたこの物語に突然暗雲が立ち込め始めるのは、Erik が Mette に対する気持ちを Thomas に語り始める場面である。Mette への気持ちを Thomas

に打ち明け、大人の世界へ近づいていく Erik を Thomas は受け入れられず、2 人の間にずれが生じ始める。そして Erik の予想外の発言に動揺し、焦った Thomas は、食卓で、Mette を執拗にからかい祖父に叱られてしまう。その際の 2 人の様子が対照的である。

(...)Endnu en ydmygelse. I Eriks påhør. Jeg var helt rød i kammen af forvirring.

Og Erik, han lod som ingenting og læste ufortrødent Asterix i køjen, (...)

(またもや屈辱だ。Erik の前で。僕は困惑で真っ赤になった。エリックはというとなんともなかったかのように動じないでベッドで Asterix を読んでいた。)

Thomas が Mette をからかったのは、Erik にも同調してもらい大人の世界へ行こうとしている Erik を引き戻したかったからかもしれない。ところが平静を装う Erik の前で祖父に怒られる結果となってしまう、非常に辱めを受けることになる。Thomas のコントロールできない感情の高まりと Erik の冷静な辛抱が伝わってくる場面であり、子どもと大人の特徴を対比しているようでもある。

そしてその翌日、Erik の Mette とキスをしたという報告に Thomas は耳を疑う。Thomas は激しく動揺し Mette に今まで以上の嫌悪感を示す。ところが、その後の 2 人が自転車をこぐ場面では、先頭をこぐ Erik を後ろから Thomas が必死に追いかける構図となっており、物理的にのみでなく精神的にも Erik に追いつきたい気持ちを暗示しているようでもある。

概して、Thomas は Mette という存在を大人の世界へ行ってしまった自分とは違うもの、言わば軽蔑視しており、Erik は Mette を未知の世界を知っている、憧れの対象としてみている。

3－4．出発

以下の場面は、休暇が終わりに近づいた頃、Erik が Thomas に突然イギリスへの引っ越しを告げるところである。

„Bare et års tid, ikke,”sagde Erik og glædede sig allerede.

Og hvorfor havde han ikke sagt det før?

(“1 年くらい行けるといいよね”と Erik は言い、既に嬉しがっていた。

それにしてもどうしてもっと早く言ってくれなかったんだ?)

Erik がまだ見ぬ世界への期待感に胸を膨らませる中で、Thomas は突然の報告に驚きを隠せず、早く言ってくれなかった Erik を心の中で責めている。こうしてどんどん先へ進んで行こうとする Erik に遅れてではあるが、Thomas にも次第に大人の世界への興味がわいていることを以下の描写から読みとれる。

„Hvad er det egentlig for nogen bøger Mette læser?”spurgte jeg en aften

og vippede på stolen. „Det er sgu rigtige bøger, du, voksenbøger altså, romaner og sådan noget...”

(“Mette が読んでいるのは一体どういう本なんだろう？”ある夜、僕は椅子をゆらしながら尋ねた。“あれこそ本当の本さ、なあ、大人の本だよ、小説とかそんなのさ。”)

Thomas は、この物語で象徴的に描かれてきた本を通して Mette への興味ともとれる疑問を抱いており、大人の世界への関心の高まりを示している。そして、休暇が終わり、別荘を発つその日、ペールのような雨が降るのだが、それはまるで見えない未来を表しているかのようである。物語は、

“Vi sejlede ind i efteråret og vandt mange nye sejre.”

(僕たちは秋へと航海に出て、たくさんの新たな勝利を得た。)

と締めくくられ少年たちが、ただ夏から秋へと季節の変化を迎えるだけでなく、少年から青年へと成長したくさんの経験をしていくであろう将来への希望にあふれた結末となっている。

4. おわりに

本作品は、少年が青年へと成長する狭間で、あらゆる気持ちが交錯する複雑な心を、思春期らしい甘酸っぱいストーリーを通して爽やかに描いている。思春期を迎えた子どもは、Thomas のようにまず大人への軽蔑と憧れという真逆のものを持ち合わせるのであろう。Thomas の場合はこの気持ちが Mette に対して表れ、始めの段階ではむしろ軽蔑する気持ちが勝っている。ところが同じ子どもの世界で生きていると思っていた親友の Erik が一歩先に大人(本作品では大人=Mette といえるだろう。)への憧れの気持ちに正直になって成長していく様をみて、葛藤しながらも大人の世界へと近づいていくのである。自信の経験を思い出してみても、自分より早く、精神的にも見た目にも大人っぽくなっていく友達を見ると、なんだか遠のいていくようで寂しいような、自分も早く近づきたいような不思議な気持ちになったのを覚えている。Thomas も Erik に対して同じような気持ちを抱いたのではないだろうか。そんな複雑な心情を見事に表現し、かつ青春特有の爽やかさを存分に持ち合わせているところに、本作品の魅力があると私は感じた。

テキスト

Red. Ammitzbøll, Lise. Østergren-Olsen, Dorte. Poulsen Henrik. 2007. *Vild med dansk 7*. København: Gyldendal.

参考資料

Forfatterweb (<http://www.forfatterweb.dk/>)

Litteratursiden (<http://www.litteratursiden.dk/>)

書籍から映像へ ～*Alting og Ulla Vilstrup* と *Rene Hjerter*～

中川真麻

1. 始めに

このレポートでは、書籍を原作として映像化されたデンマーク映画 *Rene Hjerter* について、原作 *Alting og Ulla Vilstrup* との比較を用いて考察していく。映像化するにあたり強調、削除、改変された点を挙げ、それらがどういった目的で用いられたのか、また書籍と映画それぞれの特徴とは一体どこにあるのかについて考えていこうと思う。

2. 原作だけに見られるシーン

原作と映画の二つを比較した際、それぞれ片方にのみ見られるシーンが幾つかあることが分かった。まずは、原作に有ったが、映像化された際に修正、削除されたシーンの中で最も印象的だった部分について詳しく考察する。

(1) 主人公が経験したイジメ

原作である書籍の中には、主人公が幼い頃学校に通っていたときの回想として、彼が経験したイジメのシーンが有る。これは、主人公が同じクラスの生徒たちに羽交い締めになれ、一人の女の子に無理矢理キスされるという場面だ。その結果、主人公ははやし立てるクラスメイトの一人を思い切り椅子で殴りつけてしまう。このシーンは映画版では見られず丸々カットされているのだが、そこにはどういった意図があったのだろうか。

原作のこの部分を読むことで、読者は主人公である「ぼく」もまた精神的に少し不安定なところがあるということを改めて感じる。それまでも彼が入っている施設の話や母親とのやり取りなどから主人公の特殊性は読み取れるのだが、改めてこのシーンを挿入することで、主人公のパニック時に現れる暴力的な性格を読者に印象づける効果があるのではないだろうか。しかしこの表現がどうして映画には不必要だったのか。それは、映画の他のシーンに表れていると思う。映画版では主人公の「ぼく」が入所している施設の様子や周りの患者たち、また彼自身の特徴的な性癖などが映像となって具体的に見える。そのため更にこの回想シーンを入れずとも、「ぼく」が少しメンタル面に支障を来しているということは十分観客の意識に残る。そこで映画版では、本編のストーリー進行自体には影響の無いこのシーンを丸々削ったのではないかと考えた。

3. 映画版だけに見られるシーン

この作品には2. 原作だけに見られるシーンとは逆に、映画版になって初めて追加されたエピソードも幾つか存在した。次はそういったシーンについて取り上げ、考察する。

(2) 主人公が物語の途中で拳銃を手に入れる

映画の中で、精神的に不安定な主人公と彼の相棒は施設を脱走し憧れの女優に会いにいこうとするが、相棒は警官に殴りかかった末拳銃で撃たれてしまう。その時足下に転がってきた拳銃を主人公が拾うというシーンがある。この、警官と相棒が揉める場面自体は原作にも存在するが、そこでは警察官が拳銃を使うこともなく主人公が拳銃を手に入れる描写も無い。原作では、警官に殴りかかる相棒に背中を向け、主人公はただ目的地を目指すという書き方になっている。原作では見られなかった拳銃や相棒が撃たれるというシーンはどのような意図をもって追加されたのだろうか。

原作版でも映画でもその後の相棒の安否は明らかにされていないが、原作での二人の別れ方はどちらかといえばソフトなものであった。しかしそれに対し、映画版では警察官に襲いかかる相棒が銃で撃たれ崩れ落ちるシーンまでスローモーション等の技法も用いながら鮮明に描かれており、主人公だけでなく映画の視聴者にも大きなショックを与える展開となっていた。これは、映画という視覚に訴えるストーリー進行の中で、大きな山場の一つとして二人の別れを印象づけようとしたのではないだろうか。確かにこのシーンを原作に忠実な形で映像化しても、そこで視聴者にインパクトを与えるのは難しかったのではないかと考える。

(3) ヒロインであった女優の孫が登場する

映画の最終シーンで、遂に主人公は女優の住むアパートを突き止め彼女を訪ねる。呼び鈴を鳴らし出てきたのは若かりし日の女優にそっくりな彼女の孫であった。主人公はその孫のことを女優と思い込むが、彼女の方では主人公は何かおかしい、話が噛み合わないということに気付き部屋に戻ってしまい、祖母である女優に訪問者が来たと話す。この場面も映画だけに見られるオリジナルシーンであり、原作には孫娘は登場せず、ドアを開いて出てくるのはすっかり年老いたヒロインの女優本人である。原作から映画へと作り変える中で追加されたこのシーンは、上記(1)の別れのシーンと同じく、映像ならではの視覚的なインパクトを用いようとしたものではないだろうか。

精神的に障害を持つ主人公は、自分が何度も見ている映画の主人公が実際には年を取り自分よりもずっと年上の存在であるということが今ひとつよく分かっていない。彼の中には、ヒロイン時代の若い女優の姿しか無かったからだ。しかしもちろん、視聴者の視点で見ているとそんな訳が無いということは簡単に分かるため、最後のシーンで扉が開いた時に出てくるのは当然お婆さんになったヒロインだろうと無意識の内に考える。そこでヒロインと瓜二つな孫娘を突然登場させることで、主人公に「遂に目的地にたどり着き、ヒロインを見つけた！」と思わせると同時に、私たち観客に「一体どういうことだ？」という驚きも与えられる。このシーンは、主に視覚を使って鑑賞する映画という表現方法にうってつけのものであり、活字だけを用いる書籍という形では表現しきれなかった名場面であると感じた。

4. 総括

今回、書籍と映画の二つの形式を比較したことで、同じ作品と言えどそれぞれにより効果的なシーンや表現方法がうまく用いられているということが分かった。どちらの作品も、書籍として、また映画として完成された作品であったが、それぞれの持つ特徴に合わせた違いがあるという点が非常に興味深かった。

書籍に見られる特徴としては、自分のペースで読み進めることができ、途中で混乱したとしても好きなところまで戻りまた読み直すことができるという点が大きい。これは、決められた時間の中で映像、音楽、台詞等を用いて表現される映画とは違い、読み手自身が想像力を膨らませてじっくりと理解する能動的な媒体だと言える。そんな書籍に対して、映画は一度きりの限られた流れの中で、いかに観客の心を掴み、理解してもらえるかという点が重要になってくる。そして映画の強みは、視覚や聴覚を存分に使うことで、俳優や場面全体、台詞回し、また BGM などを含めた制作者の意図が、読み手の想像力を主とする書籍よりもダイレクトに観客に伝わりやすいということが挙げられる。映画は私たちが考え、想像して楽しむというよりは寧ろ、出来上がった一つの作品を見て楽しむという点で受動的な媒体だと言えるだろう。

書籍と映画、これらにはそれぞれ長所と短所のどちらも有ると言えるし、きっと受け取る私たち一人一人の好みなどにもよって、どちらが好きか嫌いかという意見は別れるだろう。しかし今作品では、原作者自身が映画化を見越して文章を書いたとコメントしている通り、書籍も映画も文章としてのよさと映像としてのよさをそれぞれ最大限に引き出した作品になっていると感じた。書籍の方には、映画化される際に入りきらなかったであろうエピソードも幾つか入っており、主人公を始めとした登場人物の人柄や場면을想像する手助けになっていたりと、映画の中では原作のシーンによりインパクトを持たせ、最後まで観客を引き込む工夫がされていたりといった点で、原作者である Kim Fups Aakeson の書籍の時点での構想力の高さや、映画版も監督との十分な意見交換を経て作られたものなんだと感じた。今回考察したそれぞれのシーンの違いは、原作である小説と映像化された媒体である映画それぞれの特徴を最大限に生かし考えられたものであり、この *Alting og Ulla Vilstrup* という作品は、書籍と映画の二つをどちらとも読み、見ることで改めて新しい面白さや奥深さに気付くことができる良作であった。

テキスト

Fups Aakeson, Kim. 1998. *Alting og Ulla Vilstrup*. Gyldendal.

参考文献

Red. Ammitzbøll, Lise. Poulsen Henrik. Østergren-Olsen, Dorte. 2008. *Vild med dansk 8*. København: Gyldendal.

Alting og Ulla Vilstrup 作品中の映画 Hjerterfri の原作と映画での描かれ方の比較

藤岡愛実

1. はじめに

Kim Fupz Aakeson によって書かれた作品である「Alting og Ulla Vilstrup」の中で、物語の本筋と並行しながら展開されている映画「Hjerterfri」（映画化されたものにおいては「Rene Hjerter」）を、原作中と映画中での進行のされ方および内容の違いについて、作者が当初から原作の映画化を念頭に置きながら作品を作りあげたということを考慮に入れて考察していきたい。

2. 物語の進行

原作も映画版も「Hjerterfri」の始まりの場面は同じで、リンダが中央駅から恋人に会いに行くため列車に乗っているところからである。映画版のほうは、本編の始まり自体がこの場面であり、リンダが列車の車掌に『人生は生きていく中で作り上げていくものなの』と、原作と同じセリフが登場し、このセリフは最後まで鍵を握ることになる。そのあと原作では「Hjerterfri」の話の進行の前に、リンダが働くダンスレストランの同僚であるヴィーラのことを触れられている。映画版では、ヴィーラがどのような人柄であるとかリンダが彼女のことを最初どう思っていたなどは細かく触れられていないが、原作でヴィーラという女性性は、頭がよく神の心を持っているような女性とあり、リンダはきっと彼女と友達になれるであろうと確信する。そしてそのレストランで、リンダは客の一人であった産業界のプリンスに見初められアタックを受けることになり、ヴィーラもまた、ある汗っかきの男に気に入られてしまう。

リンダはダンスレストランで働くにつれて露出の多い服を着て、タバコを吸い、下品になっていき、産業界のプリンスと一緒にいるようになる。ここで、そんな彼女のことを想っている心優しい給仕のモーンスが登場する。そして、リンダとヴィーラが一緒にダンスレストランに行ったある晩、ヴィーラが汗っかきの男によって殺害される。瀕死状態のヴィーラをリンダは抱きしめ、ただ泣き続ける。ヴィーラは亡くなる間際、リンダに「愛することを忘れないで」と伝える。この場面は原作と映画版の両者に共通する。

ヴィーラの死後、悲しみに暮れるリンダに、産業界のプリンスは「すべては君の人生にとっていいことなのだよ」と言って彼女を慰め、彼女にますます献身の意を示す。産業界のプリンスは家に帰る途中の車の中でついに、リンダに指輪を渡し求婚する。リンダはあまり乗り気ではないが、それに応じる。

場面はリンダと産業界のプリンスとの婚約パーティに移り、産業界のプリンスの富のある友人を多く招いた、盛大なものとなっている。パーティの最中、リンダは「愛することを忘れないで」というヴィーラの死に際の言葉を思い出し、産業界のプリンスに指輪を返し、レストランを後にする。このとき原作では、レストランの外でモーンスが待機しており、リンダは彼と一緒に去っていくが、映画版のほうでは、モーンスは最後の場面では登

場せず、別の男性がリンダに声をかけ、彼に対しリンダが原作中の出だし文章であり、「Hjerterfri」においてもリンダが言っている『人生は生きていく中で作り上げていくものなの』で締めくくりとなる。

3. 作者が映画化にあたって「Hjerterfri」の中で変更している点

おおまかなあらすじに関しては、原作と映画版でほとんど大差はないが、設定や場面の所々でいくつか違いが見受けられる。映画という限られた時間の都合上で切り捨てられ、変更のあった場面はさておき、多くの人の前で披露することが前提の映画化につき変更があったのではないかと考えた場面について触れたいと思う。まず、原作「Hjerterfri」でリンダが働くのはダンスレストランであり、リンダは徐々に露出の高い服を着て、下品な様相を見せているが、映画版ではリンダはいたって普通のレストランでウェイトレスとして働いている。あまり下品さが強調されてもいない。また、ヴィーラに言い寄ってくる汗っかきの男性は、映画版では中肉中背の男性であり、汗っかきという特徴は見受けられない。さらに、ヴィーラが彼によって殺害される場面は、原作では汗っかきの男が婦人用トイレに入ってきて、ヴィーラをナイフで殺害するのに対し、映画版では殺害現場はリンダが居合わせる普通の部屋の中で、男は銃で殺害している。原作では殺害後に警察が駆けつけてこの男性を逮捕するところまで描かれているが、映画版ではカットされている。

ここまでの段階において分かることは、作者がリンダの服装や行動から伝わってくる下品さやセックスアピール、「汗っかきな男性」という、見ていて不快な登場人物の特徴、そしてその男性が婦人用トイレに入ってくるという、モラルに反した行為の場面を、映画版を制作するにあたって避けているということである。作者はこの作品を当初から映画化をするという前提で作っており、その鑑賞者の対象を、ある程度年齢のいった大人というよりも、中学生ほどの年齢層をターゲットとしているため、映画版のほうを中学生くらいの年齢の子供たちが見るのに適したものにするために、原作中にあった露骨な描写をあえて避けたと考えられる。けれども、映画を制作するためには、まず原作を本として出版することが必要であり、本が多くの人に關心を持たれるためには、大人が關心をそそられるような内容であることが不可欠であったため、大人の読者層が好むような、若干性的で、露骨な内容を、作品中に含ませたのではないかと考えられる。

作品の最後の場面に関しては、原作ではリンダがモーンスに助けてもらい、その後二人は一緒になるようなことがほのめかされていて、やや恋愛寄りの映画に終始してしまう感じがあるが、映画版はそうではなく、リンダが産業界のプリンスとの婚約を解消し、これから自分の意思で人生を切り開いていくというニュアンスでクライマックスを迎える。このことも前述の理由で、単なる恋愛映画で終わらせるのではなく、そうしないことで、低年齢層の鑑賞者に、この映画のテーマの一つである、『自分自身で人生を作り上げること』を考えてもらいたいと作者が望んだのではないかとと思われる。それは映画版の最後でリンダが『人生は生きていく中で作り上げていくものなの』という言葉で締めくくっていることから想像がつく。

4. おわりに

この作品を授業中に原作と映画版で、どちらが良い出来栄えかについて話し合った際には、原作のほうを選ぶ人が多かったが、私個人的には映画版のほうが見ていて分かり易くて、万人受けする内容に仕上がっていて好ましいと思った。原作のほうで、主人公の視点から物語が展開していて、登場人物の背景やトラウマ、また原作の最初から最後を通して『ノアの箱舟』の優生学に関わる話が作品の主題の一端を担っていて、読んでいてこの作品を奥深いものにしていることは勿論否めないが、内容的には、まだ本を読むことに十分にこなれていない中学生が理解するのはいささか難しいのではないかと思う。映画版のほうも、主題が容易に理解できるかといえはつきりそうとは言い難いが、本筋が映画のリンダセリフとリンクしながら進行していることや、映画の中の映画が白黒で味が出ていて、単純に本筋と区切りをつけて楽しめること、そして原作に書かれていることほど考えるテーマが少ない点では、そこまで神経を使うことなく内容を理解できると思った。

最後に、私自身この作品の内容や主題を完全に理解できているというわけではないが、主人公が『人生は自分で作り上げていくもの』ということ、自分にとって最も重要なことを最優先に行動すると解釈して生きていたのが、リンダを演じていた役者に会えたことで、それは間違っているということに気付くことができた、という点は、原作と映画を読んで分かった気がする。また、主人公を正常な人間ではなく精神的に病を抱えている人間にしていることで、映画のヒロインを一途に想い続けるあり様がいやみなく描かれていることに私は好感を持てた。この映画は、これから様々なことに悩み葛藤し、人生を歩んでいく若者が見るにはふさわしいと思うし、私も作者同様、中学生ほどの年齢層にぜひ見てもらいたいと思った。

テキスト

Fups Aakeson, Kim. 1998. *Alting og Ulla Vilstrup*. Gyldendal.

参考文献

Red. Ammitzbøll, Lise. Poulsen Henrik. Østergren-Olsen, Dorte. 2008. *Vild med dansk 8*. København: Gyldendal.

(DSO) Danmarks Støste Online Ordbog. <http://www.ordbogen.com/>

Den blomstrende have に対する様々な見方

橋本詩織

本稿では、授業にて取り扱った Naja Marie Aidt の小説「Den blomstrende have」について、以下のそれぞれの観点から内容を読み直していきたい。

1：エリックの発言が嘘であるという見方

2：トーマスが同性愛者であるという見方

3：エリックの発言は真実で、かつトーマスは異性愛者であるという見方

授業中の解釈は3であったため、まず初めに3の見方から考えていくこととする。

3：エリックの発言は真実で、かつトーマスは異性愛者であるという見方

まず問題となるエリックの発言は、こうである。“Men jeg har kysset Mette. I går aftes, ude i brændeskuret. Mens du vanskede op.”（でも僕はメッテにキスしたんだ。昨日の晩、薪小屋で。お前が皿を洗っている間に。）

本文ではその前の晩について、夕食時にトーマスがおじいちゃんに叱られ、エリックが一人 Asterix を読んでいる描写で終わっている。皿洗いが夕食後だと自然に推測されるため、時間的には十分起こりうることだと言える。また皿洗いについても、トーマスが夕食時の態度への罰として任されたとも容易に推測できる。

またコミック雑誌の Asterix について、“Og Erik, han lod som ingenting og læste ufortrødent Asterix i køjen, som vi altid havde gjort, hele sommeren og sommeren før.”（そしてエリックは、何もなかったふりをして、今年と去年の夏じゅういつも二人で読んでいたように、動じないで Asterix を読んでいた。）とあり、その夜はいつもとは違って、二人が別々のことを考え、行動し、別々の経験を得ることを予期させる。

また、“jeg har kysset Mette.”という文章から、エリックのほうからメッテにキスしたのだとわかる。そしてトーマスが嘘ではないかと言うと、エリックは（舌とか全部を使って）”med tungen og det hele”，（足のほうまでそれを感じられる）”Man kan mærke det helt ned i benene”

（（メッテの髪は）すごく柔らかかったんだ、僕たちのよりもずっと柔らかいんだ）”Det var enormt blødt...meget blødere end vores”など、直接的な描写を示しており、これは経験した本人にしかわからない証拠とも言える。そうすると、この告白をする直前の”han strakte sig og smilede veltilpas.”（彼は伸びをして、心地よさそうに笑った）は、自分の行動と成功に満足した様子、また自分はエリックより大人なのだと自慢したい様子に見える。そのあと、全く変わった様子を見せないメッテに対して、“Erik lagde sig ned og lukkede øjnene. Jeg så godt han smilede.”（エリックは寝転がって目を閉じた。僕には、彼が笑ったのが見えた。）とある。本来ならば、好きな相手から無視されれば傷つきそうなものだが、彼が笑っていることから、二人が同じ「秘密」を共有しているという満足感、また昨夜のことは終わったこととして執着しない、大人の余裕を感じているようにも見える。また、笑っている理由が”den stærke duft fra blomsterne”（花々のきつい香り）に対してである、または「花々」というのが

女性一般を指し、女性の色香に惑わされ楽しんでいる様子を表している可能性も考えられる。彼女が読んでいる本について、”Det er sgu rigtige bøger, du, voksenbøger altså, romaner og sådan noget...”（あれは本物の本だぞ、大人の本だ、小説や何か・・・）とあり、彼はメッテを大人の女性として少々美化しており、理想像となっていることがわかる。また出発前にトーマスが再びキスについて尋ねると、”Han så op på mig og smilede.”（彼は僕を見上げて笑った。）とある。未だにキスの件について気になっているトーマスを嘲笑う気持ちがあり、わかりきったことであるから返事をするまでもなく笑顔だけであると想像できる。

次にトーマスが異性愛者である理由としては、エリックとともに **Weekendsex** のバックナンバーを読んでいること、またキスの話を聞いて以降、メッテをより女性として見るようになったことがあげられる。シャクヤクの花を切り始める際はメッテの一挙一動を目で追っており、”de hvide lår stribet af havemøbler”（ガーデン家具の跡がついた白い太もも）”håret hang musegråt ned ad ryggen”（ねずみ色の髪は背中に沿って垂れ下っている）と、無意識にメッテの女らしさを観察し、また”Hvad er det egentli for nogen bøger Mette læser?”（メッテが読んでいる本ってどんな本だろう）とエリックに自らメッテの話を持ち出したりするようになった。エリックの経験の話によって、メッテが最も身近な女性であることを既に無意識的に捉えていることの表れであり、また彼の性へのあこがれもメッテに集約されている。

1：エリックの発言が嘘であるという見方

まず、エリックがキスについて話すまでの彼の行動、つまりメッテの前では緊張してうまくしゃべれないといった発言は事実であるとする。それは本来、友人に話すには恥ずかしいことであり、話すつもりはなかったが、二人の距離の近さゆえつい口から出てしまったと考えられる。よってエリックはその話を切り上げ（”’Glem det’, siger han, ’det er ikke noget vigtigt.’”『忘れてくれ』、と彼は言った。『たいしたことじゃないんだ』）、また家に戻ってからも、その話はしたくないと言う（”Jeg gider ikke tale om det”）。エリックはそのような恥ずかしい気持ちから、嘘を言ったとも考えられるだろう。

トーマスに告白する際、”Du tror det er løgn, ikk. Men jeg kysset Mette.”「嘘だと思うだろうが、僕はメッテにキスしたんだ。」と言う。トーマスの疑いに対しても、”Han sprang op. ’det er sgu rigtigt nok!’ råbte han”（彼は立ちあがり、「もう十分だ」と叫んだ）、”Han daskede med armene og bevægede sig rundt omkring mig.”（彼は腕でびしゃりと音を立て、僕のまわりを動き回った。）とあるように大げさに振る舞い、わざとらしい印象を受ける。また、メッテに触れた際感覚についても、トーマスに聞かれてから答えている。

話し始めに”Kan du holde på en hemmelighed?”（秘密を守れるか？）と聞くのは、トーマスがメッテに直接聞くことで嘘がばれるのを防ぐねらいがあるともとれ、夕食時やシャクヤクを切る時にエリックとメッテが何事もなかったかのようにふるまっていたのもこれで説明ができる。つまり、メッテは本当に何も知らず、ただ読書に夢中になっていただけである。そもそも彼女が関与しているような描写は全くなく、エリックの発言のみなのだ。おじいちゃんにほおをつねられて恥ずかしさから真っ赤になり（”Han kneb hende i kinden, hun

rødmede”）、年下のいところからかわれて真っ赤になりもじもじする（“Jeg drillede Mette og fik hende se dum ud, fik hende til at rødme og sno sig”）メッテが、慣れたようにキスをしてその後知らんふりをするなんて、できるだろうか。

決定的なのは出発前の会話で、トーマスに本当にキスしたのか聞かれ、笑顔で返すところである。私には「好きなようにとってくれて構わない」というサインのように思える。前回同じように聞かれた時には、腹を立てて大げさに返事をしていたのに、今回このように余裕な表情を見せるのは、その間に彼にとって何か変化があったからに違いない。そしてそれはおそらく、引っ越しの件ではないだろうか。

トーマスが”Og hvorfor havde han ikke sagt det før?”（じゃあなぜもっと早く言ってくれなかったんだ？）と思っているように、話題が学校のことになるまで、引っ越しの話には全く触れなかった。ここで問題なのが”’Bare et års tid, ikk.’ sagde Erik og glædede sig allerede.”の訳と解釈である。仮に『「たった1年のことじゃないか、なあ。』とエリックはすでに（帰ってくることを期待して）喜んでいた。』とするなら、エリックは友人トーマスのいる環境から離れるのが嫌で、もしかしたら来るのが最後になるかもしれないこの田舎の自然の中、親の仕事や誰かの都合で人生が決められていくことを苦しく感じ、自分自身で何か現実を作り替えてみたいと思ったのかもしれない。そこで嘘をつくことで、自分が中心の世界ができた。

この物語の冒頭に、こうある。”man kan skimte havet som en genspejling i himlen, selvom det i virkeligheden er omvendt.”（海は、まるで空に映し出されたようにかすかに見る事が出来た、本当は海に空が映っているのに。）少年たちも同様に、一見エリックがトーマスに影響を及ぼしているように見えるが、実際にはトーマスがエリックに大きく影響していたのだ。エリックは、引っ越す必要がなく、こんな素敵な庭と、（エリックにとっては）魅力的ないとこのいるトーマスを、うらやんでいたのではないだろうか。

2：トーマスが同性愛者であるという見方

まず気になったのは出発前の会話で、エリックが笑顔で返事のかわりをすると、トーマスは”Jeg ville så gerne have rørt ved hans mund.”（僕はとても彼の口に触りたかった）という表現をする。røre ved は英語で言うところの touch、触れるという意味である。余裕そうなの笑顔にむかつてその表情を変えさせるためか、またはメッテとキスをしたその口を触ってみたいと思ったのか。後者はさらに2つに分けられる。メッテのことを女性として意識していたため、その口に触れたエリックの口にも触れてみたいと思う心境か、またはエリックの口そのものに興味があるという心境である。それはつまり同性愛的な好意を、無意識に抱いていた可能性がある。この点を踏まえて考察すると、トーマスも気づいていないことだが、実はキスをしたことを知って嫉妬した相手はエリックではなくメッテなのではないだろうか。メッテには元から異性として興味を持てなかったのではないか。その部分にはこうある。”Det vendte sig i mig. Mettes tunge. Jeg kunne ikke forestille mig noget mere ulækkert.”（僕はぞっとした。メッテの舌。僕はこれ以上気持ち悪いものを想像できなかった

た。) 思春期の少年にとって興味の対象であるはずの女性の体を、気持ち悪いとまで言うのは、生理的に受け付けないということではないか。

またこの物語の語り手はトーマスであるが、同性にしてはエリックの描写のなかに、あここがれやそれ以上の魅力を感じていることが見える。例えば、”Jeg kunne se hans gyldne overkrop og det våde, mørke hår forsvinde og dukke op igen i det blå.” (彼の金色の上半身と、濡れた黒い髪が、沈んだり上がったたりするのが見えた。)、”Sikke hans brune øjne skinnede, feberblanke og våde.” (彼の茶色の目はなんて輝き、熱を帯び、うるんでいるんだ。) などである。

以上、3つの異なる見方で考察してみると、やはりどれが正しいというわけでもなく、作者はその間を、微妙な解釈の余裕を持たせて書いているのだと実感した。この物語で一番重要なのは、おそらく出発準備のシーンだろう。あの日本当にキスしたのか、と尋ねるトーマスに向かって、ただほほ笑むエリック。その姿に、子供のころ大人に言われた、「大きくなったらわかるよ」という言葉が連想される。初めての恋愛感情に戸惑っていたエリックが、たった一晩であそこまで成長してしまった。逆に、キスだけであそこまで変われるなんて、男の子は単純である。

この話は、まだまだ続くのだ。エリックもいずれ恋愛の挫折を知り、トーマスも恋愛の甘さを知り、影響しあいながら、大事なものを見失わないように、まさに“Pas nu på I ikke bliver søsyge” (船酔いに気をつけて)、人生という航海を進めていくのである。ただ確かなことは、この少年時代にはどうしても戻ることはできないということだ。

テキスト

Red. Ammitzbøll, Lise. Østergren-Olsen, Dorte. Poulsen Henrik. 2007. *Vild med dansk 7*. København: Gyldendal.

作者 Kim Fupz Aakeson について

小説、絵本、漫画、映画の脚本など、様々な分野で活躍する作家。現在、デンマーク国内で大変人気があり、多くのベストセラー作品を生み出す。1990 年に受賞したデンマーク文化省による児童文学賞をはじめ数々の賞を受賞している。

Kim Fupz Aakeson は 1958 年にコペンハーゲンに生まれるが、その後移り住んだ Albertslund で成長し学校に通った。国民学校に通っていた頃の彼は苦手なことも多かったが、椅子に座ってするような勉強については得意だったため、学校でも良い成績を修めていた。HF を取得した後も、大学へ進学し同じように勉強を続けていくのだろうかと考えていたが、将来の明確な夢はまだ見いだせないでいた。しかし偶然にも、大学へ通う代わりに、TvingsRejsendeHøjskole という旅をする人のためのフォルケホイスコーレへ通うことになり、パキスタンやアフガニスタンなどを旅してまわることになった。彼にとって、そこでの経験は全てが新しいものであった。この経験により世界は開かれたものとなって、学校や椅子に座って勉強するだけでは得られないものがそこにはあると彼は感じた。彼はこれ以降、自分のすべきことを見だし始める。帰国後は自分と同じような境遇の人たちと会い、ローカルラジオを作ったり、風刺漫画を描いたり、バンドを組んでパーカッションを演奏したりもした。そんな中、彼の漫画に目を付けた週刊新聞社にスカウトされ、1980 年代に入ってから、新聞や雑誌などでフリーのイラストレーターとして働くようになった。しかし、退屈な記事にイラストをつけることに喜びを見いだせず、次第に自分のやりたいように仕事がしたいと考えるようになった。そこで目を付けたのが絵本である。まだ 20 歳そこそこの彼には子どものことはあまりわからなかったが、大きな絵と少しの文章、それが綺麗な紙にカラーで印刷されるということに、彼自身魅かれたのである。しかし彼は絵本を書くためのストーリーは持っておらず、ストーリーを考えてくれるような作家の友人もいなかった。そこで彼は、自分でもつくれるような短い文章を考えて、それにイラストを添えていった。そして、1982 年に連載漫画 *Gålospålivet!* を出版することになる。彼はその後も作品を書き続けていたが、だんだんと長い文章を書くようになり、ついには文章だけの作品も手掛けるようになっていった。1984 年に、*Hvemvoverat vækkeguderne* で児童文学作家としてデビューする。1996 年に映画学校の脚本コースに入学してからは、短編映画、長編映画の両方を手がけている。日本でも *Så blev farfar et spøgelse* (『おじいちゃんがおばけになったわけ』) *Mor* (『ママ!』) などの絵本が翻訳、出版されている。

作品分析

作品を分析するにあたって、以下の 2 つを中心に考察したい。

1. 語り手である“Jeg”と読み手との関係
2. 小説『*Alting og Ulla Vilstrup*』の持つメッセージについて

1. 語り手である“Jeg”と読み手との関係

物語は主人公である“Jeg”によって現在時制で語られる。内容や表現についても、主人公の主観が強く反映されている。施設で働いている Henrik と Jens がそれぞれ Dumme H、Dumme J と表記されているところなどに、それが見て取れるだろう。また、物語のその時々で主人公が感じたこと、思ったことが、そのまま率直に描写されている。したがって読み手は、主人公のキャラクターや感情を容易に、そして正確に理解することが可能である。主人公の主観によるその他の表現として、たびたび挿入される Hjerterfri のシーンは、映画そのものではなく、彼の記憶の中からアウトプットされたものとして描かれている。物語の構成は、メインの時間軸として、冒頭で主人公がベッドの上で考え事をする場面から Ulla に会って警官に連れられるまでが時間の流れに沿って述べられており、そのところどころに Hjerterfri のシーンが挿入されたり、主人公の過去が回想されたりしている。しかし、物語の中の Hjerterfri が彼の記憶によるものだという点、さらに回想の場面では過去時制で語られていることを考慮すると、Hjerterfri や回想のシーンは、メインの時間軸のその時々で主人公が実際に考えていることだと解釈できる。言い換えれば、そこにあるのは Hjerterfri の映画や彼の過去そのものではなく、それらについて思考する彼自身である。すると読み手が読むものも、主人公自身であると言えるのではないだろうか。物語はあくまでも、出来事の起こった順番通りに進んでいく一つの時間軸であり、読み手たちはその時間軸に沿って、主人公と同じ時の流れの中で、彼の人生の一部分を読んでいくことになる。先に述べたように、主人公のその時々感情、考えを明確に描写し、彼のキャラクターへの理解を促すことは、主人公により近いところから物語をとらえることを可能にする。これは主人公との一体感ともとらえられるだろう。読み手は、彼の人生を読んでいながら、彼がどのように考え、彼の内面がどのように変化していくのかを主観的にとらえるという、疑似体験の効果をえられるのである。最終的には主人公の主観から離れて、読者の視点で主人公自身に物語が還元されていくわけだが、実際の体験者である主人公の主観を一度通すことでより深い、つまり多角的、綿密、正確な理解が可能になるのではないだろうか。また読者ターゲットである若者は、人生経験の量から見ても、大人ほど客観性が養われておらず、その点からも主人公を通して主観的にとらえられるようにすることは、物語を読みやすくするうえで有効なのではないだろうか。

2. Ungdomsroman 『Alting og Ulla Vilstrup』の持つメッセージ

著者である Kim Fupz Aakeson がこの小説を通して、若者たちに何を伝えたかったのか、それを分析するにあたり、まず物語内での「ノアの方舟」について見ていきたい。物語の中で「ノアの方舟」は、主人公がスサネに勧められて読んだ本であり、彼が気に入ることができなかった本でもある。彼が「ノアの方舟」が気に入らない理由はいくつもあったが、その中でも一番彼が共感できなかったものとして、ノアが良い動物と悪い動物を一緒に運んでしまったことが挙げられている。物語の中では「善」(god など)と「悪」(ond, dårlig など)という表現が多く用いられている。これは主人公の持っている、「善」と「悪」はわけら

れるべきだという考えを反映しているのであろう。彼はあらゆるものを「善」と「悪」に分けて認識している。冒頭でも、Willy や Linda、精神科医や Dumme H と Dumme J などの自分の周りの人間を、自分にとって重要かそうでないかで評価していた。これも「善」と「悪」に振り分ける作業のひとつととらえられる。さらに彼は、自分を含めた「善」に属するものと、「悪」に属するものとが、それぞれ違う世界で住分けられればいいのにも思っている。「善」の人だけが住む世界、それこそが彼の理想とする世界であり、それは自分だけでなく他の人へも有益なことであると考えている。したがって、「善」と「悪」が混在しているこの世界自体も、彼にとっては「悪」の世なのである。しかし、彼の考えの中にも矛盾がある。例えば、彼は Willy を「善」なるものとしてとらえているが、Willy が暴力をふるうことを良く思っていない。彼の理論で考えれば、「悪」である暴力を用いる Willy は、いくらその他が「善」であっても、彼の中に「善」と「悪」が混在していることで「悪」ととらえられる。しかし主人公にとって Willy は親友であり、力強い Willy のことを頼りにもしている。そして主人公自身も、母親をフライパンで殴ったこと、施設に火を放ったことなど、自分の中にも「悪」があることに気がついているのではないだろうか。「悪」を否定する自分の理論と、その「悪」を持つ自分自身との板挟みになっているとも考えられる。また、flæskesteg を焦がしたときに母親に浴びせられた “Du er misfoster, du er misfoster, hvorfor blev du født dit misfoster!” という言葉や、トレーラーハウスでの “Jeg håber jeg egner mig til at leve.” という彼の考えからも、彼が自分の存在意義をはっきりと見いだせていないような印象を受ける。最後の場面で、「善」と「悪」があるからこそ人生が楽しくなると分かった時の、“Jeg forstår næsten det hele...” というセリフは、「善」と「悪」が入り混じる自分自身の存在意義が今やっとわかったという気持ちが込められているのではないだろうか。自分の中にある「悪」、そして母親に浴びせられたトラウマを内に秘めながら施設に籠っていた主人公が、愛する Linda を助けるために外の世界へ出ていき、その外での経験を通して自分の存在意義、そして世の中の面白さを見出していく。この過程はまさに、特に将来の夢もなく、学校で椅子に座って勉強ばかりしていた著者が、海外での滞在経験を通して、世界を広げ、自分のなすべきことを見つけていった経験によく似ている。つまり著者 Kim Fupz Aakeson は若者たちに対して、外の世界へ出て行って様々な経験を通して視野を広げ、人生のやりがいを見つけてほしいという思いが込められているのだ。それこそが、本作品 1 分目の “Livet er hvad man gør det til.” に込められたメッセージではないだろうか。

まとめ

この作品には、著者である Kim Fupz Aakeson の経験を反映した強いメッセージが感じられる。著者という現在のステータスを作り上げる重要なターニングポイントであり、彼自身もその時の感動を “Verden havde åbnet sig,” と自伝に記している。それまでの学校での机上の勉強と、全く違うものであったことは想像に難くない。多くの子どもたちに、できるだけリアルなカタチで、という思いが “Jeg” を用いた素直な文体に感じることができる。一見、異質なものととらわれそうな精神的な障害を主人公に持たせ、「善」と「悪」につい

て新しい切り口で解釈しながらも、難解さを感じさせない彼の児童文学者としての才能を垣間見ることができた。

テキスト

Fups Aakeson, Kim. 1998. *Alting og Ulla Vilstrup*. Gyldendal.

参考文献

廣野由美子. 2009. 『批評理論入門』(第3版). 東京: 中公新書.

Red. Ammitzbøll, Lise. Poulsen Henrik. Østergren-Olsen, Dorte. 2008. *Vild med dansk 8*.
København: Gyldendal.

Bülow-Olsen, Lena. Kjær Harms, Susanne. Skaarup, Vibeke. 2004.

*Livet er hvad man gør det til Kim Fupz Aakeson – et morsomt
og tankevækkende forfatterskab*. København: Alinea

Litteraturesiden.dk <http://www.litteraturesiden.dk/>

Den store danske <http://www.denstoredanske.dk/>

Alting og Ulla Vilstrup 分析——省略箇所に見る原作と映画の違い

宮城悠旗

1. はじめに

デンマーク語文学ゼミの後期授業では、デンマーク人作家 Kim Fupz Aakeson の長編小説 *Alting og Ulla Vilstrup* (『全てとウラ・ヴィルストロップ』)、及びその小説を原作とした映画「Rene hjertes」(純粋な心)の分析を行った。授業を通して、小説と映画に込められた作者のメッセージや、文学と映画という表現方法の違いを知ることができた。この作品は、原作である小説と映画版では内容に大きな差は無いが、この 2 つでは受け取り手のそれぞれの作品に対する印象が異なる。理由はいくつか考えられるが、その 1 つとして、原作にあり、映画版にない要素がその原因だという仮説を私は立てようと思う。原作での登場人物の内、何人かは映画では省略され、また原作ではあったが映画では省かれたシーンもある。本考察では、そういった要素から 3 つ選び、それらが原作でどのような役割を果たし、映画版との差を生み出しているのかを検証する。

2. 作者紹介：Kim Fupz Aakeson

1958 年、コペンハーゲンに生まれ、ビズオウア (Hvidovre) とアルバーツルンド (Albertslund) で育つ。1980 年代初めから、新聞や雑誌のイラストレーターとなり、1982 年に漫画家となる。1984 年には絵本 *Hvem vover at vække guderne?* (誰が神たちをあえて起こすのか?) で作家としてデビューする。1996 年に映画学校を卒業した後、短編・長編映画の脚本も書き、1999 年に脚本を書いた映画「Den eneste ene」(唯一の人)はヒット作となる。作家としての作品は絵本や児童文学が多いが、他にも短編・長編小説、劇、映画脚本、ラジオドラマと、作品は多様である。また作品数も多く、本だけでも 70 タイトル以上出版している。

本考察で扱う *Alting og Ulla Vilstrup* は 1998 年に出版された長編小説で、中学生・高校生を中心にヒットした。2006 年には映画監督 Kenneth Kainz により、「Rene hjertes」というタイトルで映画化された。

3. 作品あらすじ

主人公の「僕」は精神的障害を持っており、とある施設で暮らしている。友人は同じ施設の患者である Willy で、暴力的な面があるが、「僕」とだけは仲が良い。「僕」の母親はよく酒を飲んでおり、「僕」を罵る。「僕」は 14 歳の時に買った、モノクロ映画「Hjerterfri」(ハーツ)のビデオがお気に入り、今まで何度も視聴し、映画が「僕」の倫理観に強く影響している。「僕」は映画の主人公である Linda に好意を持っており、Linda の役を演じた女優 Ulla Vilstrup が実在することを知った「僕」は、Willy と共に施設を脱出する。脱出後に 2 人は警察に追われ、Willy は捕まってしまうが、「僕」はなんとか Ulla の自宅にたどり着く。実際に会った Ulla は年老いており、「僕」はショックを受けるが、Ulla は「僕」を家に招き入れ、2 人は「Hjerterfri」のビデオを一緒に見始める。映画の途中で警察がやってくるが、2 人に映画を最後まで見させてやる。映画を見た後、「僕」と Ulla はお互いに礼を言い、「僕」

は警察と一緒に家を去る。

この作品は、施設という安全だが狭い空間を抜け出し、映画「Hjertefri」の物語と外の現実社会での体験を通して、「僕」が人生について学ぶ物語となっている。作品に込められたメッセージの1つとしては、「Hjertefri」での Linda の台詞でもある「人生は自分で作るもの」が考えられる。

4. 作品分析

ここでは映画版で省略されている、Poul、母と義父の訪問、Mogens Hjort の3つのシーンを分析する。

4. 1. Poul

原作には、「僕」の入れられている施設の中にある、木工作業場で働く Poul という人物が登場する。主人公の「僕」は Poul と仲が良いが、Poul が友達だとは思っていない。それは「僕」が、友達とは仕事に関係なく自発的に会うものであり、Poul は当てはまらない、と考えているからである。それでも Poul が作業場にいることは、彼がいないことよりも良いことだと「僕」は思っている。

この Poul は映画版では一切登場せず、彼のいる木工作業場も見られない。この Poul のシーンは、原作でどのような役割を果たしているのだろうか。

このシーンで重要なのは、Poul が友達か否かということよりも、Poul が「僕」の友達ではないが、仲の良い人物として満足しなければならない、という「僕」の考え方だろう。このシーンの最後には、“Sådan noget kan man tænke over, og så kan man gøre sig i bedre humør.”（そういうことを人は考えることができ、そして人はより良い機嫌でいられる。）と書かれており、また“Det er vigtigt med humor.”（機嫌は大事なことだ。人生は自分で作るものである。）という「僕」の考えが記されている。ここから読み取れるのは、良い機嫌であるためには、現状に満足するという自分の努力が必要である、という考え方である。これは、作品中で何度か登場する「少しの苦難も我慢できなければ、生きる価値は無い」という考えに通じている。つまりこのシーンは、現実には不満を抱かないようにしなければ、現実社会では生きていけないというメッセージを表した形の1つなのである。

このシーンが映画版で省略されている理由の1つとしては、映画版では上記の「少しの苦難も我慢できなければ、生きる価値は無い」という言葉が登場しないことが挙げられる。映画版に込められていない意図を表すシーンは必要ないので、映画版では取り入れなかったのだろう。

4. 2. 母と義父の訪問

原作では、1人暮らしを始めた「僕」のアパートを、「僕」の母と義父が訪ねる回想シーンがある。母が「僕」を訪ねた時、母からはすでに酒の臭いがしていたが、母は義父とともにビールを飲み、酔って叫び始める。「僕」が駐輪場に逃げ込んだ後、母と義父は外に出

て、母は罵り叫んでいた。

映画版では母と義父は登場するものの、特に酒で酔っている様子はない。映画版で上記のシーンが登場しなかったのは、時間の限られている映画では省略する必要があったためである、と考えることもできるだろうが、他に理由が存在すると考えられないだろうか。

このシーンが暗示するものとして考えられるのは、現実の理不尽性である。原作では、「僕」が直接何かをしたわけではないにもかかわらず、怒られたり嫌な思いをしたりする場面が登場する。母と義父が「僕」を訪ねるシーンも、「僕」が誰かに迷惑をかけるような行動をしていないのに、母は酔っ払って「僕」を不快にさせ、さらに「僕」を罵る言葉を叫ぶ。別の場面で「僕」が学校でいじめられていたことを回想するシーンが原作のみに存在するが、これも他の学生からいじめられるという、現実社会の理不尽な苦痛を表していると考えられる。

一方映画版では、「僕」が理不尽な理由で苦難を体験することはあまりない。「僕」の思考は一般人と異なるため、「僕」自身に悪気はなくとも他人に迷惑をかけ、それにより「僕」が苦難を体験するシーンがいくつか登場する。「僕」は施設での集会で他の患者を殴ったために、職員によって拘束されるし、「僕」が映画版のラストシーンで警察に撃たれるのは、「僕」が拳銃を所持し、警察に向けて発砲したからである。この作品には小説・映画共に、「僕」が施設という狭い世界から出て、外の現実世界で「悪いもの」を含む様々な物事を経験する、というコンセプトが存在すると考えられるが、原作である小説版では、現実世界をやや理不尽なものとして描かれており、上記の母と義父のシーンも、それを表すようその1つだと推測できる。

4. 3. Mogens Hjort

原作中の映画「Hjertetfri」には、Lindaの働くレストランでウェイターをしている Mogens Hjort という人物がいる。彼は映画で唯一優しい男として登場し、Linda に好意を抱いており、Linda を家まで送ってやろうとしたり、死にゆく Vera を見て悲しむ Linda にコートをかけてやったりするが、Linda には拒絶される。しかし映画のラストシーンでは、Linda レストランを去る時に Mogens が現れ、Linda は彼の手を取り、2人はレストランを一緒に去る。

Mogens は映画版では存在が省略されており、Linda はレストランの上司に見送られてレストランを去る、という風にラストシーンが変更されている。原作でも Mogens の出番は少ないが、映画のラストシーンにかかわっていることから、その存在には何かの意味があると推測される。

Mogens と Linda の関係で重要だと考えられるのは、初めは Mogens を拒絶していた Linda が、最後には Mogens と共にレストランを去ることを決意している点である。ここで思い出されるのが、Vera が死に際に Linda に言った“Husk at elske,...”（愛することを忘れないで）である。この台詞は、Linda が「産業界のプリンス」との結婚を拒否する理由であるが、自分を愛している Mogens と共にいることを Linda が選ぶ理由にもなっているのである。Linda が Mogens を愛しているのかははっきりと描写されていないが、今まで拒絶していた Mogens

を受け入れた点、「僕」が2人のこの先の生活がどうなるかは分からないとしている箇所、少なくとも2人がこの先一緒にいることは確かだと分かる点から、Mogens に一定以上の好意は抱いていると考えて良いだろう。このことから、Mogens の存在が、物語に込められたメッセージの1つである「愛すること」を象徴していると解釈できる。映画版で Linda がこの「愛すること」を実践したのは、「産業界のプリンス」との結婚を、本物の愛によるものではないとして、中止する場面だけであり、誰かを愛するというよりは、愛していない人とは結婚しないという消極的な実践方法である。一方原作では Mogens という人物を愛するという、より具体的で積極的な行為で「愛すること」が実践されているため、「愛すること」が映画版よりも強調されているのである。

5. まとめ

ここまで、映画版で省かれた3つの登場人物・場面が原作でどのような意味を持っているのかを考察してきた。Poul のシーンには、気に入らない人物を殴るように、自分の思い通りに行かないことを不満に思わず、我慢することが生きていくうえで必要だという意味が込められていた。母と義父のシーンでは、安全な施設とは違い、理不尽で辛い外の世界が描かれていた。Mogens Hjort は、Linda が愛を学んだことを表す存在として、物語に登場していた。前者2つのシーンは、外界から隔絶した施設の外には、苦難に満ちた現実世界が存在し、その苦難に耐えて生きていかななくてはならないことを表していると考えられる。また後者は、人生に愛が必要だということを具体的に描写している。

これらのメッセージは、映画版にも含まれてはいるのだが、現実世界の苦難は主に警察の追跡からの逃亡で描写され、「愛すること」は映画版ではあまり強調されていない。前者の変更は、恐らく映像にした場合の印象の強さによるものだと思う。また後者のメッセージの印象の弱さは、原作・映画版両方のテーマの1つである、「世界には善悪両方が存在し、そのどちらも認める」ということを重視した結果、複数のテーマを前面に押し出すよりも、1つの大きなテーマを主軸とする事を選んだことによるものだろう。こうした事情で省略された要素により、原作と映画版で異なる印象が与えられるのである。

6. おわりに

私はこの考察を通して、原作と映画版のどちらが優れているかということを決めるつもりはない。確かに原作である小説は映画版と違い、分量に制限がないため、作者の込めたいメッセージを好きに盛り込むことができる。しかし映画版が存在することで、映画版で省略されていた箇所が逆に浮き彫りになり、原作をより深く理解できる。また映画版は、小説にはない利点を生かし、メッセージを効果的に表現している。小説版と映画版の両方を理解することで、作者の意図を本当に理解することができるのではないかと、私は考える。

テキスト

Fups Aakeson, Kim. 1998. *Alting og Ulla Vilstrup*. Gyldendal.

参考文献・資料

デンマーク語文学ゼミレジュメ (Alting og Ulla Vilstrup について)

Red. Ammitzbøll, Lise. Poulsen Henrik. Østergren-Olsen, Dorte. 2008. *Vild med dansk* 8.
København: Gyldendal.

Bogrummet.dk (<http://www.bogrummet.dk/forfatter.asp?forid=602>)

Fortællingen.dk (<http://fortaellingen.dk/anmeldelse/kim-fupz-aakeson-alting-og-ulla-vilstrup>)

Gyldendal (<http://gyldendal.dk/kim-fupz-aakeson>)

Litteratursiden (<http://www.litteratursiden.dk/forfattere/kim-fupz-aakeson>)

”Den blomstrende have”の自然，風景描写における考察

奥村佳子

1. はじめに

ナヤ・マリーイ・アイト (Naja Marie Aidt) の”Den blomstrende have”「花の咲き誇る庭」は思春期にあたる少年の物語である。子どもから大人へと成長する間の，繊細な時期を風景描写と共にうまく描いている。まだ無邪気で少年らしいトマス (Thomas) と，それよりも少し大人の世界に入ったイーレク (Erik)，この2人の変化しつつある関係を中心に物語は進む。

アイトは少年達の繊細な心を見事に表現しているが，特に風景描写や自然をうまく利用して，登場人物の心情を読者に伝えていると感じた。よって本稿では，アイトが描いた風景や自然が物語にどのような効果をもたらしているのか，という点について考察する。

物語は5つの意味段落に分かれているので本稿もそれに従い，段落ごとに考察を進める。

2. 作者紹介

ナヤ・マリーイ・アイトは，グリーンランドで生まれ，7歳の時にコペンハーゲンに引っ越している。彼女の表現豊かな風景，自然描写はグリーンランドで過ごした幼少期の影響であると考えられる。

アイトは1991年に詩集 *Så længe jeg er ung* 『私が若い限り』でデビューする。それ以来，詩の他にも短編小説，劇脚本，児童文学などの作品を書いている。「花の咲き誇る庭」は短編小説集 *Vandmærket* 『透かし』(1993) の中のひとつである。アイトはこれまでに数多くの大賞を獲得しており，詩や短編小説は外国語にも翻訳されている。

3. 作品分析

■第1段落

1段落目は物語の導入部分になっており，トマスとイーレクが過ごす夏休みの様子が描かれている。彼らはテラスでケーキを食べたり，海で遊んだり，岬まで競争したり，無邪気に遊んで楽しい休暇を過ごしている。物語の冒頭は以下のように始まる。

Det var en stor og blomstrende have; man kunne skimte havet som en genspejling i himlen, selvom det i virkeligheden er omvendt; det var i juli, pæonerne hang tunge og ceriserøde på deres stængler.

Vi sad i de grønne havemøbler på terrassen, græsplænen lyste grønt omkring os, vi spiste bradepandekage, sød og med æbler og kanel.

＜大きくて花の咲き誇った庭だった。空に海が映っているようだった。現実とは反対であるにもかかわらず。それは7月のことで，牡丹の花が重く，チェリーレッド色をして茎に垂れていた。

僕たちはテラスの緑色の庭家具に腰掛けていた。周りには芝生が緑色に輝いていて、僕たちは甘い、リンゴとシナモンのパンケーキを食べた。＞

(奥村訳、以下同様)

花々が咲いた大きな庭、「空に海が映っているようだ」と形容するほど青く綺麗に透き通った空、チェリーレッド色のボタンの花、そして茎からは緑が連想される。そして時期は7月でありデンマークでも最も気持ちの良い天候であろう。色彩豊かでのんびりとした時間を思わせる風景からは、2人の夏休みがとても素敵なものであることが伝わってくる。夏休みとして最高の環境の中で、トマスとイーレクは海で泳いだり、自転車で出かけたりと、少年らしくはしゃいで遊んでいる。

第1段落にはトマスのいとこ、メデ (Mette) も登場する。本好きのメデはおじいさんに少しからかわれるが、何も言わず赤くなってもごもごしている。少し不思議な少女であることを思わせるが、この時点でトマスとイーレクとの接点はなく、2人はメデを気にせず遊んでいる。そして最後はトマスやイーレクが夏を過ごしている家の描写で終わっている。

Det var et sommerhuskvarter af de bedre, og mormor og morfars hus var gammelt og i to etager med stråtekt tag. Indenfor var der storblomstret betræk på bambusmøblerne, lidt jordslået var lugten. Vi sov i køjer på bittesmå kamre, spiste med stor appetit dagen igennem og elskede hinanden som brødre og lidt til.

Det var fuldendt, enestående, duften af jordbær og sved og døde, brændte fluer. Vi var begge blevet fjorten år i foråret, Erik lidt før mig.

＜それはまじな別荘地区だった。おばあちゃんとおじいちゃんの家は古く、草葺き屋根の2階建てだった。中には大きな花柄のカバーがついた竹の家具があり、少しカビのにおいがした。僕たちは小さな部屋の2段ベッドで寝て、1日中食欲旺盛でよく食べ、兄弟のように、もしくはそれ以上にお互いが大好きだった。＞

トマスの祖父母の家は昔ながらの懐かしさを匂わせる。ここでトマスとイーレクが一緒に仲良く住んでいたことがわかる。第1段落の舞台でもある祖父母の家の詳細を、あえて段落の終わりに書いてあることから、筆者が意図的に最後に書いたのだと考えられる。このように最初と最後が風景描写であるため、読み手は物語の世界に入り込みやすいだろう。そして家も、自然環境も、天気も素敵で、大好きな友達との最高の夏休みの始まりとして描かれていることは、後の物語の展開に重要な関連があるのではないだろうか。この点に関してはまた後で述べることにする。

■第2段落

トマスとイーレクが浜辺で遊んでいる場面から始まり、その直後に以下の文がくる。

Store havmåger skreg højt oppe, horisonten syntes uendelig, som himlen, som sommerferien, som vores unge liv

＜大きなカモメが空高く鳴き、水平線は無限に思われた、空のように、夏の休暇のように、僕たちの若い命のように。＞

物語はトマスの視点から一人称で書かれているので、この”vores unge liv”というのはトマスとイーレクの若い命となる。この一文からは、自然を満喫し、イーレクとの夏休みを楽しみ、このような生活がずっと続くと感じているトマスの姿が読み取れる。しかし、このトマスの喜びは後の物語の変化を予兆するような雰囲気や込められているとも捉えることができる。これから何が起きるか全く知らないトマスへの皮肉ともとれるのではないだろうか。

まさにこの後、物語に少し変化が起きる。イーレクがトマスに「メデを見ると胸が痛い、変な感じがする」と言うのだ。イーレクがメデに本気で恋をしているのかどうかは定かではないが、異性として意識しているのは確実である。しかしトマスはその真意を理解せずに、ただ「あれだけ醜いのだから気分も悪くなるさ」と返す。2人の関係に変化が見え始める。

■第3段落

第2段落の後半から第3段落にかけては、風景描写は描かれず、トマスとイーレクのやりとりが中心となっている。トマスがメデをからかうようなことを言っても、イーレクに相手にされず、トマスは傷つくことになる。この辺りからトマスとイーレクの精神的な成長の差が徐々に表面化しており、物語の流れにおいても転換部分だと言える。情景描写が無いことで、少年たちの心情が浮き彫りになっている。

■第4段落

4段落目はイーレクがメデにキスした事を、トマスに告白する場面から始まる。トマスはそれが信じられず、メデとキスをするという事に嫌悪感まで覚えた。しかしイーレクに「やってみればわかるさ」と言われ、イーレクが急に大人になってしまったように、また自分が小さく馬鹿であるように感じるようになる。

この後、トマスのおじいさんが牡丹の花が今年もうすぐ終わることを話し出す。

„Se engang pæonerne her" sagde morfær og lagde sin hånd beskyttende om en af dem, „de er lige ved at takke af for i år. Stilken kan næsten ikke bære hovedet mere. Jeg tror, vi skal se at få dem plukket før det er helt slut."

＜「ここの牡丹をちょっと見てごらん。」とおじいさんは言って花を守るように手をかざした。「今年はもう花が終わりかけている。もう茎が頭をほとんど支えられないよ。すっかり終わってしまう前に花を摘み取ってしまわないとな。」＞

おじいさんはこのように言ってから、メデに花がらを切るように言う。牡丹の花の季節が終わるということは、トマスにとっての少年時代にも終わりがやってきて、新しい時期へと移り変わっていくことを示していると考えられる。メデが牡丹の花がらを摘むということは、牡丹の木に一旦区切りをつけ、新しい時期への準備をすることである。これはメデの存在によって、トマスの少年時代にもひとつの区切りがついて、一歩成長する時期へと向かうことを示唆しているようにも思える。

■第5段落

最終段落ではイーレクが1年間イギリスへ行くかもしれない、ということを嬉しそうにトマスに伝える。新学期の直前になって言われたトマスは、なぜもっと早くに言ってくれなかったのかと、心の中で思う。恐らくトマスは寂しいのだろうが、それを直接イーレクに言えないところが、トマスの精神的な若さを象徴している。

最終段落に描かれる情景は、トマスとイーレクが荷物をまとめて帰る日に降る雨である。

Den dag vi pakkede vores ting og lagde det hele hulter til bulter ned i vores rygsække, regnede det for første gang i mange uger. En fin, tæt regn, næsten lydløs, som et slør over haven, en dis over vandet.

<僕たちが荷造りをしてリュックサックに全部を詰め込んだ日、ここ何週間で初めて雨が降った。きれいな濃い雨で、ほとんど音が無かった。海の霧、水にかかる霧のようだった。>

何週間も降っていなかった雨が降ったのである。音の無い、きれいで濃い霧のような雨であった。イーレクがメデとキスをした事に対する動揺と、イーレクの引っ越しを突然伝えられた事で寂しさとショックを感じるトマスの心模様を映している。しかし、どしゃぶりのような悲しげのある雨ではない。霧のような雨は憂うつな気分も伝わってくるが、雨が上がった後の、輝いたすがすがしい空も想像できる。そのすがすがしい未来を表現しているのが物語を締めくくる最後の一文である。

Vi sejlede ind i efteråret og vandt mange nye sejre.

<僕たちは秋へと船出し、新しい勝利をたくさん勝ち取った。>

新学期への船出、そこで様々な経験をしたことが浮かび上がる一文である。"vandt"と書いているので、様々な経験を通してしっかり成長していったことが想像できる。

4. おわりに

全体を通して見ると、風景、自然描写は1段落目に圧倒的に多く描かれていた。第2段落以降は、少年達の行動描写や会話の間に少し書かれている程度である。物語の導入部分

に風景描写を多用することで、読者を物語の世界に引き込む効果があると考えられる。後半の第4，5段落は、特に強調したい部分を、風景描写を用いて表現しているようであった。

作品分析で前述したように、第1段落はトマスにとって素晴らしい夏休みを読み手に印象づけるように書かれている。しかし最終的にトマスは、イーレクがメデとキスをして、一歩先の大人の段階へと成長していることを思い知らされ、イーレクの引っ越しも間際になって伝えられた。イーレクが精神的にも、物理的にも離れていってしまい、トマスにとってこれまでの無邪気に遊んでいた夏休みとはひと味違ったものになった。何も考えずに遊んで楽しく過ごす少年時代を終え、友情や恋などの複雑な経験が多く待っている、大人の世界へと踏み入れる節目の夏休みである。物語の導入部分に描かれた楽しい夏休み、地平線のように無限に感じた少年時代が、最終的な結末をより際立たせているように思う。

テキスト

Red. Ammitzbøll, Lise. Østergren-Olsen, Dorte. Poulsen Henrik. 2007. *Vild med dansk* 7. København: Gyldendal.

参考資料

デンマーク語固有名詞カナ表記小辞典

<http://www.sfs.osaka-u.ac.jp/user/danish/dictionary1.html>

Litteratusiden.dk <http://www.litteratusiden.dk/forfattere/naja-marie-aidt>

Naja Marie Aidt HP <http://www.najamarieaidt.com/>

第 2 部 ・ その 1

スウェーデン編

Var inte rädd för mörkret

Var inte rädd för mörkret,

ty ljuset vilar där.

Vi se ju inga stjärnor,

där intet mörker är.

暗闇を怖がる必要はない

そこには光が休んでいるから

星はひとつも見えない

暗いものが何もないところでは

I ljusa irisringen

du bär en mörk pupill,

ty mörkt är allt som ljuset

med bävan längtar till.

明るい虹彩の輪の中で

あなたは黒い瞳をもっている

全ては暗いから

光がふるえながら恋焦がれる全ては

Var inte rädd för mörkret,

ty ljuset vilar där,

var inte rädd för mörkret,

som ljusets hjärta bär.

暗闇を怖がる必要はない

そこには光が休んでいるから

暗闇を怖がる必要はない

光が心のなかに持っているから

作者紹介：Erik Blomberg（1894-1965）

Erik Blomberg は、1894 年 8 月 17 日に、スウェーデンの首都ストックホルムに生まれる。彼は美術史家を主な職業とし、他にも作家や翻訳家の仕事もしていた。1919 年ウップサラで哲学博士号を取得、その後 1920～26 年まで Stockholms Tidningen で、1926～27 年に Stockholms Dadblag で美術批評家の仕事を請け負った。この二つはどちらも新聞社で、保守的な立場を取っていたと言われている。1930～39 年には Social Demokraten という新聞社で文学・演劇批評家となる。この新聞社は社会民主主義に基づいた会社であるため、彼の勤める新聞社が変わった数年間の間で、考えが何らかの変化をしたことが想定される。また翻訳家としての一面もあり、フランス語・英語・アメリカ英語・ドイツ語・中国語の抒情詩を翻訳したこともあり、非常に語学が堪能であることが見て取れる。晩年には Svenska Akademiens översättarpris(1960)、Elsa Thulins översättarpris(1963)などの翻訳の賞を受賞している。

作品解釈・批評

まず、詩に書かれてある言葉の解釈からしていきたいと思う。

第 1 連の、「そこには光が休んであるから」とあるが、これは暗闇と光とを全く別物としてとらえているのではなく、暗闇と光は表裏一体のもので、交代で入れ替わっている様子を表している。例えば、光を昼、暗闇を夜と考えると、日が沈んで夜になると一見昼はなくなり、夜と昼は全く別のものであるように感じられるが実はそうではない。今は夜であっても地球の裏側では昼であり、また同じ場所でも時間が経てば昼になり夜になる。暗闇と光は対立するのではなく、入れ替わるものである。その次の「星はひとつも見えない 暗いものが何もなかったころでは」というのは、日中など光の中では星は見えず、夜の暗闇の中でこそ星は光り輝くことができるということである。

第 2 連の、「明るい虹彩の輪の中で あなたは黒い瞳をもっている」の部分だが、私たち日本人は「目が黒いうちに」などと言うように、一般的に虹彩も瞳も暗い色をしている。しかし、北欧の人々は虹彩の色が青色や緑色である人が多く、彼らにとっての虹彩は青色や緑色などの明るい色を示しているのではないかと考え、ここでも暗闇と光が対比されている。また虹彩を表すスウェーデン語 iris は、虹彩という意味のみならず、花のアイリスという意味も持っている。アイリスはアヤメ科の花で夏至祭の行われる 6 月に咲く青い花で、希望や高貴を象徴している。この iris という言葉は、詩の意味を考えると虹彩以外にはとることはできないが、隠れた意味として光に対する希望を表しているのではと考えた。またアイリスの花の青い色は北欧の人々の目の色を表している。次の「全ては暗いから 光がふるえながら恋焦がれる全ては」だが、ここでは光が暗闇を求めていることを表現している。明るいものが暗いものの中で目立つだけではなく、明るいもの自身は暗いものを恋焦がれるように求めているのである。

第 3 連は第 1 連とほとんど同じ表現が使われているが、各連の 2 行目に注目してみると、第 1 連はピリオドで終わり、第 3 連はコンマでつながっていることに気がつく。これは、第 1 連では次の文とのつながりが薄いため切れているが、第 3 連では次の文との意味のつながりが強いので、繰り返すことによって意味を強調していると考えた。コンマを使うことで内容をクライマックスに向けて高め、より密接な関係にする効果がある。

次に、北欧の文化から見たこの詩の解釈を進めていきたいと思う。

先ほども述べたが、北欧の人々にとって光と暗闇は対立するものではなく、互いに密接なものである。次にそのことに触れた文章があるので紹介したいと思う。

「¹北欧的な時間に最も顕著な特徴は、光と闇の特有な交替である。短い夏の夜と長い冬の夜とは、北欧における時間体験のきわめて基本的な部分であり、その結果、一年を二つの部分で計算することは北欧人たちの第二の天性となっているほどである。この二つは、それぞれ半分を成すというのではなく、おのおの一個の全体なのである。北欧とは夏と冬である。その間に春と秋が割り込んでいるが、それはまさに割り込み以外の何物でもない。北欧的な時間は、何よりも光の時と闇の時なのである。」

このことはまさにこの詩に反映されている。北欧人にとって冬は長く、辛く、厳しいものであり、夏の短い時期を楽しみ、祝おうという姿勢をしている。冬には夏を恋焦がれ、ロシアの光に希望をかける。北欧の人々にとって、一見恐れがちな暗闇も実は恐ろしいものではなく、光と表裏一体であり、また暗闇の中で輝く光、逆に光の中で際立つ暗闇をこの詩は表している。この暗闇と光の対比は、文字通り暗闇と光と捉えることもできるが、もっと視野を広げて冬と夏、夜と昼、黒と白、女と男、月と太陽、老人と子供、死と生など対比される概念としての解釈も可能ではないかと思う。この詩は歌の歌詞になっており、その歌がロシア祭で歌われていたことも、光に希望を託す北欧の人々の気持ちをよく表しているのではと考えた。

この詩は韻を踏んだリズムカルな詩である。北欧人の基本的な意識として持っている光と暗闇の感覚を美しく描いている。この詩の特徴的な点は、他の多くの詩がその作家の生い立ちや人生から得た経験をもとに書かれている一方で、この詩は個人的な詩というよりもむしろ北欧人が一般に共通して持つ感覚を詠っているという点である。だからこそ歌の歌詞となって、人々が光を求めるロシア祭に歌われたのだと考えた。暗闇と聞いて、姿も見えず暗く寂しいと一概に言うことはできず、実は暗闇は光が求めているもので、光が心の中に持っているものなのである。この詩が収録されていた本は、“*Plommon till alla barn*”という子供に向けた絵本であり、ひたすらに暗闇を怖がる必要はない、光はちゃんと存在しているからという、子供に対して少し教訓めいた、勇気づけるような意味も含まれているのではないかと思った。夏が短く、長い冬を乗り越えるためには暗闇なんて恐れてはいられない。光という希望を持って、辛い冬をたくましく生き抜いていこうという厳しい環境の北欧人ならではの感情が表れた詩である。

テキスト

Anderson, Lena. 1992 *Plommon till alla barn: en samling svenska dikter* Stockholm

参考文献

K・ハストロプ編 菅原邦城・新谷俊裕訳『北欧の世界観』1996 東海大学出版会

¹ p37,l14～p38,l2

SÖMNEN I SOLEN

Sov jag länge
vaknade jag tungt
vid stenen i solen.
Fjärilen fladdrade bort
på slumpartade vinddrag.
Soldagen talade runtomkring
allestäldes närvarande i insektsurren.
Skuggan hade krupit ifrån mig.
Den låg längre bort.
Eken stod tyst i backen
med sommarssekler i sin krona.
Runtom susade mörkare lundar :
sov, vad tjänar det att vakna
från en sömn så djup
som vore den nere i jorden.

太陽の中の眠り

長い間眠ったので
ゆっくりと目を覚ます
岩のそば 太陽の中で。
蝶が羽ばたいていく
でたらめなそよぎへ。
晴れた日が話しかける
あちらこちら 虫のハミングに。
影がわたしについてまわる。
長く長く横たわって。
檜の木が丘にひっそりとたたずむ
何世紀分もの夏をこずえに携えて。
あたりで暗い木立がささやいた :
眠りなさい、どうして目を覚ますんだい
深い眠りから
大地の奥底にある深い眠りから。

(丹羽美咲訳)

作者紹介：Harry Martinson(1904-1978)

ハリー・マティンソン(Harry Martinson)はスウェーデンの小説家で詩人。1904年5月6日スウェーデンの南東部ブレーキング地方イエムスフグで生まれた。7人兄弟の5番目であった。7歳の時父親を亡くし、1912年に母親は子供たちを見捨てアメリカに移住。マーティンソンは里子として育つ。過酷な労働を余儀なくされるなど厳しい幼少時代を過ごす。彼は養家から何回か逃げだそうとし16歳の時、とうとう脱走に成功し船に乗りこむ。結果的に19の船で働き南米やインドなどを回り世界中を旅した。彼の詩には船舶の乗組員としての体験が反映されている。数年後、肺の病気のためスウェーデンに帰国することを余儀なくされた。定職に就くこともなくスウェーデン国内で浮浪者として過ごした。21歳の時に、マルメにおいて浮浪罪で逮捕される。

1929年に詩人としてデビュー。詩集『5人の若者』(Fem unga,1929)をアルチュール・ルンドクヴィストらと刊行し、スウェーデンにモダニズムを紹介した。彼の詩には自然への愛と鋭い視点、ヒューマニズムへの深い思いがあった。

同じく1929年に作家で14歳年上のモアと結婚。2人の娘をもうけるがモアと離婚ののち1942年にイングリッドと再婚。1949年にはスウェーデンアカデミーのメンバーに選ばれる。1974年にエイヴィンド・ユーンソンとノーベル文学賞を受賞。しかしふたりともノーベル賞選考委員会に属し、他に有力候補がいたためこのことに対する批判に耐えきれず1978年に自殺。宇宙を漂流する宇宙船を描いた『アニアラ』(Aniara,1956)が彼のもっとも有名な詩である。

作品解釈

この詩は夏の野外での昼寝を詠んでいると思われる。太陽の光を浴びて、自然の中で眠ることの心地よさ、もっと眠っていたいという気持ちが伝わってくる。北欧人は長く暗くつらい冬があるゆえに夏、太陽が大好きである。つまり、冬の暗さとの対比の中でこそ夏の太陽が一層輝くのだ。この詩の中にもいくつか対比が描かれている。大地の奥底にある深い眠りとあるように、そもそも眠りとは深く静かで暗いものである。その静かな眠りに対して蝶の羽ばたき、虫のハミングなどの動きの描写がある。また、詩の中に影や暗い木立とでてくるが、影ができるのは太陽があるからこそである。明るさがあるからこそ暗さが存在するのだ。本来、眠りと太陽は対比をなす存在であるのだ。そのふたつを組み合わせることで、夏の太陽の明るさや温かさと眠りの深さの両方をより効果的に表現していると言える。

この詩は暗さの中でこそその明るさを描いている。そしてこの詩から物事はそれだけでは成り立たず、陰と陽、動と静など相対するものの影響を受けて存在しており、一方がもう一方を互いに際立たせているのだとわかる。

出典

Harry Martinson “Dikter” VAGNEN

参考文献

<http://www.bibliomonde.com/auteur/harry-martinson-1250.html>

<http://www.kirjasto.sci.fi/harrymar.htm>

Pär Fabian Lagerkvist の詩

弘瀬祐也

Det är inte gud som älskar oss

Det är inte gud som älskar oss, det är vi som älskar honom.

Som sträcker oss efter honom i längtan efter något annat,

Något utöver oss själva,

Så som kärleken gör.

Och vår längtan blir hetare ju mindre den bevaras,

Vår förtvivlan djupare ju mer vi förstår att vi är övergivna.

Att vi är älskade av ingen.

Vad är djupt som saknad, som obesvarad kärlek.

(från *Aftonland* Pär Lagerkvist)

我々を愛しているのは神ではない

我々を愛しているのは神ではない 我々が神を愛しているのだ

我々が神に手を伸ばしすぎる 何かを求めて、

我々自身より上位にあるものを求めて、

ちょうど愛がそうするように

我々の求める気持ちが拒まれることで その気持ちはより熱い

ものとなり

見捨てられたのだとより理解することで 我々の絶望はより深

くなる

何からも我々は愛されていないと理解することで

寂寥のように深く、報われない愛のように深いものは何か

(弘瀬祐也訳)

作者の紹介：Pär Fabian Lagerkvist (1891—1974)

ペール＝ラーゲルクヴィストは作家・詩人・劇作家・エッセイストとして活躍した。1891年にスモーランド地方のヴェクショーで生まれ、小さい頃から伝統的キリスト教教育を受けて育った。ラーゲルクヴィスト本人曰く、「聖書と讃美歌集しかない家で育ったことは誠に幸運なことである」。10代の頃ダーウィニズムに感化されキリスト教から脱却するも、文学的動機としての聖書および神学への興味は保持した。

1911～12年にはウップサラで学び、1910～20年代にはデンマーク、フランス、イタリアで過ごした。1913年「言語芸術と絵画芸術」を著す。この時期には現代主義と美学的根本的観念を支持していた。

1916年、「苦悶」を発表。死への恐怖・世界大戦・個人的難局が描かれた。特に死への恐怖は後1925年発表の自伝的小説「現実の客」でも触れられている。この作品のようなペシミズムは次回作から徐々に後退していく。「永遠の微笑」(1920)以降は、その表現における単純かつ明確さを追求していった。1926年「心の歌」を発表。このころには彼は二度目の結婚をしており、この作品では愛と人間精神の謳歌が謳われている。「苦悶」に見られた絶望感は減少しており、この作品により彼はスウェーデンにおける主要な詩人となった。だが1933年の「刑史」ではヨーロッパを覆い始めていた全体主義と残忍性への懸念とヒトラーへの批判を書き、「The Man Without Soul」(1936)ではファシズムを批判した。1944年の「こびと」では人間の内に潜む根源的悪を描いた。この作品により初めて彼は北欧以外で国際的な評価を獲得する。

1940年スウェーデン・アカデミーの一員となり、1951年には「バラバ」(1950)でノーベル賞を獲得。彼のほとんどの作品の中心には、「神がもはや存在せず、神が語りかけることのない世界における人間の立場」というテーマが据えられている。これが彼にとっての根本的テーマであり、1950年代以降は信仰と懐疑について扱うようになった。また、「バラバ」におけるバラバに象徴されるものは「信仰なき信者の姿」である。同じテーマを扱ったものには、「巫女」(1956)や「アハスヴェルスの死」(1960)などがある。

作品解釈・批評

彼は文学的動機としてキリスト教、聖書、神学を扱い、晩年には『バラバ』以降「信仰なき信者」の姿をテーマとして扱った。つまりは信じるべき神の存在への懐疑を描いてきた。彼は、神がもはや導いてくれない世界における人間の居場所を、晩年を通して書いていたと言える。

この詩もそれらの作品の一つで、神の存在への懐疑を表している。この詩が収められている詩集『Aftonland』における前後の詩にも興味深い節がある。例えば「存在しないことで私の心を満たすあなたは誰ですか？存在しないことでこの世界を満たすあなたは？」、「もしもあなたが神を信じながらも、神など存在しないならば そのときあなた

の信仰はなおさら大きな奇跡となる」、「暗闇の底深くにあつて、存在しないものを大声をあげて叫び求めるものはなぜいるのか?」、「存在しない神 彼こそ私の魂を赤々と燃え立たせる」などである。これらは神の存在への懷疑と同時に、神への強い憧れをも表している。

今回扱ったこの詩の題名は「我々を愛しているのは神ではない」と訳される。ラーゲルクヴィストは神との対等な関係を求めた。つまり神が我々を愛し、我々もまた神を愛するという関係だ。しかし現実では神は我々に何もしてくれず、我々が一方的に神を愛するのみだ。我々は愛情を求めて神に「手を伸ばしすぎる」のである。最後の時にキリストは「父よ、私を助けてください」と神に請うた。だがキリストは十字架に磔にされ処刑されてしまった。神を信じる信者たちはいる。しかしそれに答えてくれる神は存在しないと、少なくとも彼は感じているのだろう。

「gud」がの「g」が大文字の「G」でないところに注目したい。「Gud」であればキリスト教における神を表すことになるが、ここではそうではなく一般的な神を表していると解釈できる。

ここでラーゲルクヴィストは、「神など存在しない」、「神への信仰など無意味だ」ということを訴えかけているわけではない。前述した通り、彼は神聖なる存在、あるいは神の存在しない世界における人間の姿を描いてきた。そして神との対等な関係を求めた。我々は神からの愛情を強く求め、あこがれる。それ故に見捨てられた時の絶望はより一層深いものとなる。題名とは裏腹に、神からの愛情・報酬を求めた詩である。

参考文献

http://en.wikipedia.org/wiki/P%C3%A4r_Lagerkvist

http://sv.wikipedia.org/wiki/P%C3%A4r_Lagerkvist

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9A%E3%83%BC%E3%83%AB%E3%83%BB%E3%83%A9%E3%83%BC%E3%82%B2%E3%83%AB%E3%82%AF%E3%83%B4%E3%82%A3%E3%82%B9%E3%83%88>

Den Svenska Litteraturen ~Modernister och arbetadiktare~ (Lars Lönnroth, Sven Delblanc)

A HISTORY OF SWEDISH LITERATURE (Ingemar Algulin)

ラーゲルクヴィスト 自伝的小説 2 作の主題～‘現実に仮住まいせし客’と女性パートナー～ (菅原邦城)

Edith-södergran の詩

渡邊友里

Månen

月

Vad allting som är dött är underbart	生命なきすべてのものはなんと不思議で
och outsägligt :	形容しがたいことだろう
ett dött blad och en död människa	枯れ葉や死者
och månens skiva.	そして月の欠片もまた
Och alla blommor veta en hemlighet	すべての花々はみなある秘密を知っていて
och skogen den bevarar,	森がそれを守っている
det är att månens kretsgång kring vår jord	つまり地球の周りの月の軌道は
är dödens bana.	死の行路
Och månen spinner sin underbara väv,	月は糸を紡ぎ美しい織物をつくる
den blommor älska,	花々はそれを愛している
och månen spinner sitt sagolika nät	月は糸を紡ぎ優美な網をつくり
kring allt som lever.	すべての生あるものの周りにかける
Och månens skära mejar blommor av	晩秋の夜に
i senhöstnätter,	三日月が花々を刈り取る
och alla blommor vänta på månens kyss	月の口づけは
i ändlös längtan.	花々の永遠のあこがれ

出典 : *Landet som icke är* Edith-södergran

(渡邊友里訳)

作者紹介：Edith-södergran(1846－1912)

エーディット・スーデルグラン（Edith-Södergran）はフィンランドの詩人であり、1892年ロシアのサンクトペテルブルクでスウェーデン語を母語とするフィンランド人の家庭に生まれた。エーディットが生まれて3ヶ月後に、サンクトペテルブルクでコレラが蔓延したため、フィンランドのライヴォラに引っ越す。しかし1906年父マッツに結核菌が見つかり、このときから母娘二人きりの生活が始まる。

エーディットは1902年にサンクトペテルブルクのドイツ学校に入学したが、体調不良を訴えることが多くなり、1908年結核にかかっていることが判明した。彼女は幼い時からすでに多くの詩を書いており、在学中の彼女の詩のほとんどはドイツ語で書かれていた。しかしこの時以来、母語であるスウェーデン語のみで書かれるようになった。

1916年、彼女の最初の詩集である『詩集』（Dikter）、1918年、第二の詩集『九月の豎琴』（Septemberlyran）、1919年、第三詩集『薔薇の祭壇』（Rosenaltaret）、そして1920年、第四詩集『未来の影』（Framtidens skugga）が出版された。しかし彼女の作品に対する評価は厳しく、彼女は深く傷つき、それ以上詩を発表することはなかった。

1922年、フィンランド文学界に新しい風が吹き、彼女の詩も多くの人に待ち望まれるようになったが、1923年6月24日の夏至の夜、自分の詩が受け入れられるのを体験することなく31歳の若さで亡くなった。

エーディットの死後、友人であるハーガル・オルソンらによって彼女の遺稿集、『どこにもない国』（Landet som icke är）も発表された。その後も毎年のようにエーディットを称える出版物がつづき、今でも絶えることがない。

作品解釈・批評

この詩には月と花が登場するが、月は世界中の神話で死者が最初に行く場所、死者の国とされており、闇や死の象徴である。また、花は短い命やはかないものの象徴であり、人間、若くして病に冒されてしまったエーディット自身を例えている。また詩の中で höst(秋) という単語がでてくるが、彼女の詩の中ではたびたび登場する語である。すばらしい夏の後にやってくる北欧の秋はとても寂しく、輝きを失ってゆくさみしさを生や死になぞらえて表していると考えられる。エーディットは1922年、『自然についての思考』（Tankar om nature）という文章のなかで、「死にゆく自然の子を死は愛する。彼らは月が彼らを奪う瞬間を切望している。」という警句を書いている。それはまさにこの詩の最後の一節と重なっており、彼女は自分に迫っている死を、自然のものとして受け入れたかったのだろう。

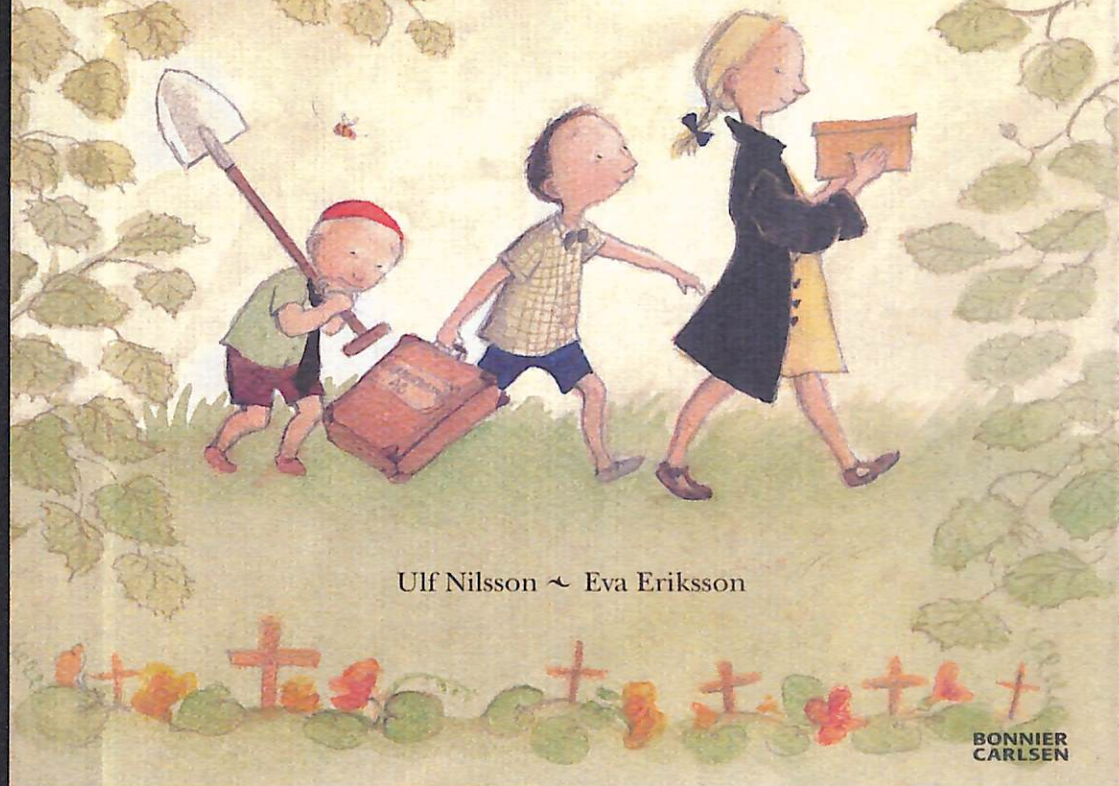
出典： Edith Södergran, redigerad av Hagar Olsson, 1925. *Landet som icke är*. Holger Schildts förlag

参考文献： 三瓶恵子著. 2011. 『どこにもない国：フィンランドの詩人エディス・セーデルグラン(1892-1923)：評伝越境する魂』 東京. 富山房

第 2 部 ・ その 2

スウェーデン編

Alla döda små djur



Ulf Nilsson ~ Eva Eriksson

BONNIER
CARLSEN

どうぶつそうぎやさん

ある日のこと。ぼくらはたいくつしていた。何かおもしろいことはないかなあって。エステルは死んだマルハナバチを見つけて顔をかがやかせた。「あらまあ、かわいそうに、ああ、なんてことかしら。やっと何かが起こったわね」ってエステルは言った。ハチはしましまで、毛むくじゃらだった。エステルはそいつを手にとって、背中をそっとなでた。はねは見るもくしゃくしゃ、あしはだらんってなっていた。「ハチさん」エステルがボソッとやった。「わたし、あなたのこと大好きよ」

エステルはいつもとっても勇かんだった。でもぼくは小さいし、生きてるってことも死んでるってこともなんだかこわかった。ぼくの身近で死んだ人はだれもいなかった。「これをもってなさい」エステルは言った。「おちびさんにお墓をほってあげるの」ぼくは一步後ずさりして両手を後ろにかくした。「いくじなしね」エステルはあきれて言った。「だって刺されるかもしれないもん」とぼくは答えた。「どうみても死んでるじゃない、バカねえ！」とエステルは言った。

そこでぼくは言った。「かわりに何か書くことならできるよ 詩を書いてあげる、こわーい死のことを書いてあげる」エステルはフンと鼻とって、シャベルと花の種をいくつか、それにハチを入れるための葉巻の箱を持ってきた。ぼくらはひみつの道を歩いていった。ほかにだれも知らない森のあき地まで。



あき地に着くと、エステルは深い穴をほって、ぼくは詩をかいた。ぼくには書けるんだ、ぼくはいっぱい考えるし、いっぱい言葉も知ってるんだ。エステルは汗をかいていた。お日様はかがやいていた。そこらじゅうで鳥がさえずっていた。「フン！詩だなんて！」エステルはばかにしたように笑った。

ぼくらはハチを真っ暗な穴にうめた。青い花の種をまいた。黄色い花と赤い花を輪っかにしておいた。

手のなかの　ちいさなちいさないのち
とつぜんきえてしまった　すなの深くに

エステルは鼻をすすった。それから言った。「ちっちゃなハチさん、ああ、でもいのちつてのは、それでもつづいていくものなのね。」

エステルはあき地を行ったり来たりした。何かいい案はないかと頭をなやませていた。「世界は死んだ生き物でいっぱいよ。どのしげみにも、鳥やチョウチョやネズミが死んでるのよ。だれかがちゃんと世話をしてやらなくちゃいけないのよ。だれかが進んでそういう死んだ動物みんなを埋めてあげなくちゃ」エステルは言った。
「だれがやるの？」ぼくが尋ねるとエステルは答えた。
「わたしたちよ」

ぼくらはしげみややぶの中、木の下や野原を探した。でも思っていたほどたくさんの死んだ動物たちを見つけることはできなかった。エステルの弟のプッテも手伝ってくれたけど、ぼくらが何を探しているのかわからなかったから、何も見つけれなかった。プッテはとっても小さかったから、そんなに役には立たなかった。

やっとのことで、ぼくらは死んだトガリネズミを見つけた。「よしよし」エステルは満足そうに言った。「さあしごとよ」「この子、何してるの？」とプッテがきいた。「ねてるだけなの？」「死んでるのよ」とエステルは答えた。「“しんでる”ってなあに？」プッテはきいた。
「どうしてねたまんなの？」

ぼくらはちゃんと説明した。生きてるものはみんな死ぬんだってことを。みんな、みんな、いつかは死んで、いなくなっちゃうんだ。つらくて悲しくてみんな泣く。それでやっとプッテはわかってくれた。

「ぼくも？」とプッテ。「ぼくもしんでしまうの？」「今じゃないわよ、おばかさん」とエステルは言った。「きみがよぼよぼのおじいちゃんになったらね、そしたら死ぬんだよ」とぼくは言った。プッテの下くちびるがぶるぶるとふるえはじめた。「でもそしたらママもパパも悲しくなっちゃうよ・・・」

「ネズミをもって！」エステルはぼくにそう言って、いじわるく笑った。ぼくはポケットに手をつこんで首を横にふった。「死んだ動物がこわくてさわれないんでしょ。お見通しよ！あんたってほんとうに役立たずね！」

ぼくらはプッテにひみつの小道を教えて、それからいっしょにぼくらの親愛なるともだちトガリネズミくんを埋めてやった。エステルはあき地のまんなかにお墓をほった。それに家の作業小屋から葉巻の箱をもっと見つけてきて、くぎをうって十字架もつくった。

ぼくは詩を読んだ。よくわからないことだけれど、とつぜんふりかかってきた死について。

死はつづく 何千年も 何千年も
死んでるってたいいの？
ひとりぼっちなの？ こわいの？

プッテは大つぶの涙をながした。やっとわかったのだ。「ぼくも？」と彼は鼻をグスンといわせた。「でもママが悲しくなるよ・・・」ぼくらはやさしくていい子たちだった。死んだ動物たちの世話を引き受けたんだもの。きっと、世界一しんせつだった。

このたいくつな夏の日を、ぼくらはとても楽しくすごした。ぼくらは「かぶしき会社そうぎ屋」をはじめた。ぼくらは世界一のおそうしきをするんだ。ほんとだよ。そして地面に転がっているだけのかわいそうな動物たちみんなを助けてあげるんだ。

エステル穴ほりがかり。ぼくは詩をよむかかり。プッテは泣くかかりだった。

ぼくらはかばんを用意して、そのなかに世界一のおそうしきに必要なものぜんぶつめた。

シャベル
小さい十字架用のアイスの棒
大きい十字架用の木の板
とんかち
くぎ
ひつぎ用の、小さめの箱と大きめの箱をたくさん
きれいなはか石
ふでと絵の具
青い花のたね
花（黄色と赤色）

エステルはきんじょの人みんなに電話をかけてききまわった。ぼくはエステルが話している様子をきいていた。ドゥースフルトの方に、死んだハムスターがいることがわかった。

「わかりました！わたしたちはヌッフエを最高の方法でまいそうします。では、おそうしきは3時にしましょう。歌ですか？ええ、歌うこともできますよ、さんび歌をいっぱいね！お値段はたったの5クローナ、いえいえ10クローナです。いつまでお墓の面倒をみるかって？　ずっとですよ！　だれにもじゃまされないきれいなあき地でね。ずっとです。よくわかりました。死ぬほどよくわかりましたってわたしたちはいいですけどね・・・」

小さなヌッフエちゃんは目を閉じていて、とってもかわいかった。「ねているだけだったらどうする？」とプッテは言ってヌッフエを起こそうとした。「おーい！」

エステルはおそうしき用の声で言った。「彼はえいえんの眠りにつきます。でもわたしたちは彼のことをぜったいに忘れません。10クローナももらったのよ！しごと中はいい子にしていなさいね。プッテ。」ぼくはおなかがいたくなかった。だって、ずっとお墓のめんどろをみるって約束してしまったんだもの。

ぼくはヌッフエにさんび歌をかいた。

もう冬がきて寒くなる
ありがとう　ヌッフエちゃん　本当にありがとう
きみにかんしゃするよ　ララ　ララ　ラララ・・・
(とってもとってもゆっくりうたうこと)

お日さまがかがやいていて、あたたかかった。ヌッフエの飼い主のおんなの子はわんわん泣いた。プッテはなぐさめようとして言った。「ヌッフエが元気になったら、またお墓からだしてあげるからね。ぜったいだよ、ラララ・・・」プッテは石に色をぬりながら鼻うたを歌った。

エステルのパパは、ぼくらがおんどりのおそうしきをしたらいって言った。おんどりはおいぼれで、よぼよぼで、首をちょん切られることになっていた。エステルはでっかいシャベルででっかい穴をほった。そしてぼくらはおんどりを引きとって、穴の中にねかせた。あたまとからだはもう一度くっつけた。めんどりたちがひみつの小道をついてきた。

死は　2時にとつぜんやってくる
どうして　どうして　ねえどうしてなの？

めんどりたちをこの悲しいおそうしきによんであげた。でもめんどりたちはただ楽しそうに土をつつついて、虫をさがしているだけだった。「いったいあんたたちどういうつもりなの？」とエステルはめんどりたちに向かってどなった。「悲しまないといけないでしょ！おたんこなす！」

エステルは死んだニシンを3匹みつけた。冷蔵庫のふくろの中に入っていた。「色ぬりだ、石に色ぬり楽しいな」とプッテは言った。

それからニシンがもう1匹
かわいい　ちっちゃな　ニシン
人生って　いつもね
思うようには　いかないね

「この子たちには何としてもちゃんとした名前をつけてあげなくっちゃ。」とエステルは言った。『ニシンがもう1匹』なんてお墓に書けるわけないでしょ。」

おばあちゃんのところには、わなにかかったネズミが9匹いた。おばあちゃんはいつも、そういうねずみを、ネコのえさにやっていた。ネズミたちには名前がいるから、最初に洗礼式をすることにした。「なんじをパウラ・アントニアと名づける。なんじはひねくれスヴェンである。」まるっこいネズミを、ぼくらは「ふとっちょぶーちゃん」って名づけた・・・

ねえ、ふとっちょぶーちゃん　さよなら
気をつけてね　きみのことを　おもっているから

今ではあき地はきれいな墓地らしくなってきた。あいにくそうぎ屋はちっともお金にならなかったけど。エステルはとつぜんきげんが悪くなった。

「わたしたちの会社はとんだそうぎ屋よ！」とエステル。「ちいさくてくだらない、たいしたことのないどうぶつばっかうめてるじゃない。そのうち窓わくから死んだハエを集めることになるんじゃないの。それか砂利のところにいるアリとかね」

「走りまわってるよ」とプッテが言った。「生きてるじゃない、死んでないよ」

「どっちだって同じよ。とにかくうめるの。死ぬんだから」エステルはとてもふきげんだった。

「なにか大きなどうぶつがいいわね、いかりくるったイノシシとか」エステルはうっとりしながら言った。「おっきくて、ふとっていて、おこっているイノシシ。おこりすぎてしんぞうがはれつしちゃったの」

ぼくは詩を作った。

ブタも ウシも カササギも
いのちのみちのりを おえたんだ

「みち？」プッテがねぼけまなこで言った。「ひかれたの？ボンって」

ひかれたどうぶつ、そうだわ！エステルはまたごきげんになった。ぼくらは重たいそうしきかばんをひきずって歩いていった。

ぺちゃんこになったハリネズミをみつけた。針がいっぱいあった。エステルのパパがバイク用のグローブをもっていた。ぼくらはハリネズミをお墓にねかせた。大きい真っ黒こげのパンみたいだった。

天国では君は走れるよ。やわらかな足で
のそのそ歩きまわることはないんだ おっきくてぺちゃんこなとげとげさん

それからぼくらはまた道路にそってさがした。そしてついに大きくてすごいものを見つけた。

ぼくらが見た中でいちばん大きな野ウサギだった。「ぜったいにスコーネ県いち大きいわ！」エステルはうれしくて野ウサギのまわりをくるくるおどった。「死んだどうぶつはきもちわるいと思ってるそこのあんた」エステルはぼくに言った。「手袋を使ってもいいわよ」

エステルはひつぎにするための旅行かばんを用意した。野ウサギはフェルディナンド・アクセルソンという名前になった。エステルはまくらとチェック柄のブランケットでひつぎをいっそうすてきにした。「さあ、あなたは永遠の旅に出るのよ！」とエステル。

プッテは泣いた。

「ぼくのときは？ぼくが死ぬときもまくらを入れてくれる？」

「ええ、あんたが死んだらまくらを入れてあげるわよ」とエステルが言った。

「おやすみ用のブランケット（？）は？」

「もちろん、お気に入りのブランケットもよ」

「ぼくのウサギさんは？」

「ウサギがかわいそうよ。かわりにくまちゃんにきなさい！」

「じゃあぼくのごはんは？」

「クッキーもパンも、ジュースも好きなだけよ」

「そっか、ならいいや」プッテは泣くのをやめた。
エステルはプッテの鼻をかんであげた。

安らかにおやすみ、いましばらくおやすみ
きっとすぐ会えるよ、またいつかまた会おうね

エステルは目になみだをうかべていた。「もういっかい読んで」エステルは静かに言った。
「あんた、詩をかくのがいやにうまいわね、ほんとに」

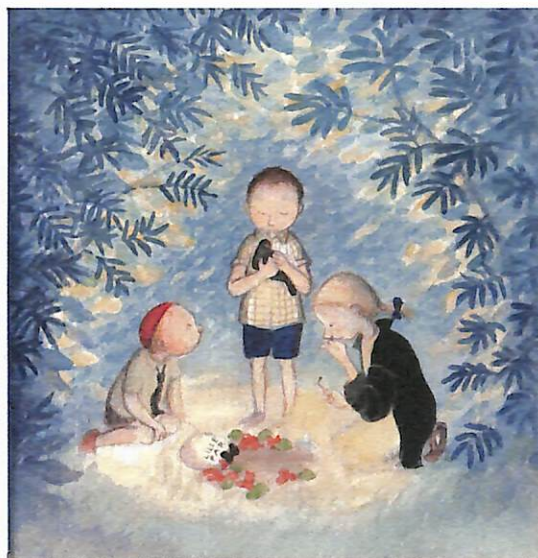
あたりは暗くなりはじめた。ぼくらは今日という日にすごく満足していた。ぼくらはとてもおりこうで、いい子だった。でももうつかれちゃった。

すると、とつぜん2羽のクロウタドリがしげみや林のあいだを追いかけてっこしているのが目に飛びこんできた。そしてそのうち1羽がベランダの窓にまっすぐつつこんでくる音が聞こえた。「パン」と音がした。ぼくはだれかが死ぬのを見たことがなかった。ぼくらは地面の上に転がっているクロウタドリのそばにしゃがみこんだ。そいつは羽をバタバタさせていた。口をあけていた。足はビクビクしていた。それからまったく動かなくなった。あっという間だった。死んでしまった。

「おそうしきしなきや」プッテが言った。「クロウタドリくん、世界一のおそうしきをしてあげるからね」とエステル。「そうだね、きっとまたよろこんでくれるよね」とプッテ。

ぼくはこわいと思っていた気持ちをすっかり忘れてしまっていた。クロウタドリは黒くてつやつやしていた。くちばしは黄色かった。ぼくはその大きな鳥を抱き上げた。とても軽かった。それから森のあき地に運んで行った。エステルは何も言わなかった。「こどもがいたかもしれないよ。そしてママも」とプッテ。「名前はこちらパパにしよう」ぼくは言った。

ぼくらはおそうしきの準備をした。あき地の中は教会の中の天井みたいに緑におおわれていた。ぼくらはろうそくに火をともし、いちばんすてきな石に「ちびパパ」とかいた。ぼくはクロウタドリを胸にだいて詩をよんだ。ちびパパはまだあたたかかった。地面は冷たかった。



歌は終わる。いのちも終わる。
きみのあたたかい体は冷たくなる。なにもかもが暗くなる。
きみは暗やみをてらすたいまつみたいだ
ぼくらのところにいてくれてありがとう。

もう1羽のクロウタドリがとてもきれいな声でうたった。詩をよんだとき、ぼくは声がつまった。エステルは泣いた。ぼくらは重々しい気持ちにつつまれた。悲しみだ、このあき地を黒くおおいつくす悲しみだ。ついにプッテは眠ってしまった。

いのちはながい、死は短い
ほんのいっしゅんで、人は死ぬ。
少しずつ草がしげり、こけが生え、
お墓に花がさく。
すべてがしずかに安らかになる。

次の日、ぼくらはまったくちがうことに夢中になっていた。



ANALYS OCH FÖRSTÅELSE AV NORDISK LITTERATUR

——”Læsefrugter” i Tanabes Seminarium, 2011——